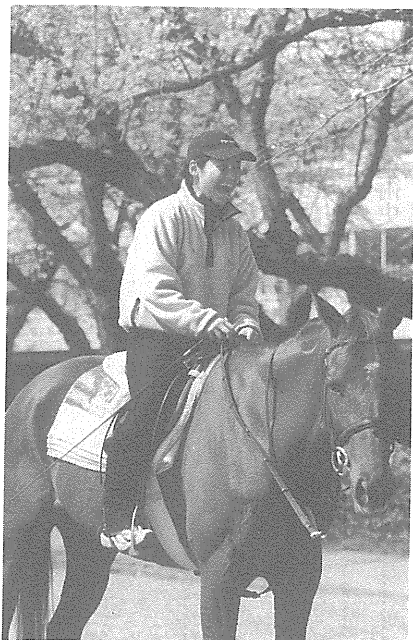


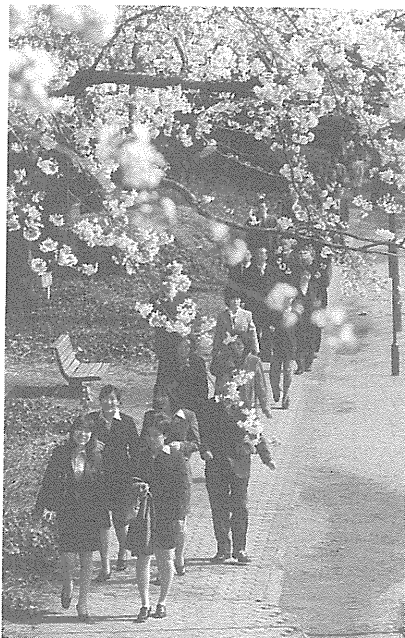
麗澤教育 第五号 △目次▽

写真・麗澤大学近況	2
△論説▽		
学生の専門への関心のもたせ方	6
比較文学の効用	13
△麗大を支える人々▽		
我が師を語るー我妻和男先生のこと	20
広池学園で学んだ私の剣道	27
私の馬術史	36
人生のキー・ワード「やる気」	44
茶道部と黒川ちる子先生	50
△道徳科学授業報告▽		
死別体験者を授業に招いて	55
△大学祭報告▽		
「ブリティッシュ・ガーデン」を大学祭に展示して	71
第三十五回麗陵祭レポート	84
△学友会活動報告▽		
部長会の現状と将来の展望	91
野球と大学生活	96
初心者にも分かるサニーゲイツ対策講座	101

麗澤大学近況



馬術部、自慢の馬を披露



期待に胸をふくらませ、入学式会場へ
向う新入生。
(平成10年度)



平成9年度、麗澤大学卒業・修了記念パーティー。
麗大麗澤会亀井会長（左）と麗澤会賞受賞者。



学校記念日に軽音楽部が演奏



留学生歓迎会で「ILE AIYE～WAになっておどろう～」を大合唱



大学祭、大場ゼミによる出店



野外昼食会



七夕フェスティバルで茶道部裏千家がお点前披露



'99日本の心と美の祭典関東大会
麗大 A チームが学校対抗の部で3位に。



留学生1日バス旅行。葛西臨海公園にて。



卒業生との懇親会。個別ブースで先輩のアドバイスに聞き入る学生たち。

学生の専門への関心のもたせ方

——いかにして導いていくか？

国際経済学部教授 大場 裕 之

委員会からこのテーマで依頼があった。当初、正直言って戸惑った。それは、私にこの分野のエキスパートとして登場し、HOW「O」ものを書けという過大な期待なり妄想が感じられたためである。私はこの道のエキスパートでもなく、その資格もない。しかし、

「ふだん感じている事をザックバランに書いてもらって結構です」という言葉（つまりはZ「O」を言わさないことが真意か？）で、脆くも陥落し了承した。幸いなことに、ゼミなどを通じて大学で接する学生は意欲的で、燃えている。彼らが支えになっていることも、このテーマを書く力となった。専門に学生をいかに導くか」というテーマについて、まさに毎日が試行錯誤

の連続で、私自身も迷える小羊であり、私のささやかな経験を語る、いや証（あかし）することにより、私のように悩める大学教育の現場に立つ教師の応援歌となれば幸いである。

さて、このテーマを掘り下げてみると、今日の学生には専門いや学問に関心がないということがその暗黙の前提と考えられる。では、考えるべき問題とは何か？

ひとつは、今の学生はほんとうに専門なり学問に対して関心がないのだろうか、という前提を問う問題。もうひとつは、学生が専門に対して関心がないのなら、その原因は何か、といういわば「見える問題」を考察

することになる。前者の問題は、学生の専門分野への関心度を検証することであるが、ここでは学生は専門に関心がないという一般的な前提（元氣な学生が少ないという指摘と一致する）に立ち、後者の“見える問題”を中心に検討する。

今の学生はなぜ専門に関心がないのか？

その原因に対する見方として、大きく三つに分けて考えることができる。第一に、学生の学ぶ姿勢に問題があるとする見方。第二に、教師の教える姿勢なり教え方に問題ありとする見方。第三に、大学教育のあり方、システム自体に問題があるとする見方。ここでは特に第二の問題を中心に体験的にお話する。その理由は、大学の教員が教育現場での指揮者であり、第一の学生の姿勢や意欲、かつ第三の教育システムに強い影響を及ぼしていること、また、私自身がその当事者であるためである。なぜ学生は専門に関心を持ってくれないのだろうか？いくら自分が頑張っても反応してくれない。程度の差こそあれ、こうした悩みや嘆きを持たない教師はいないのではないだろうか、当の私も

例外ではない。問題はどこにあるのだろうか？ もはやどうしようもない、絶望的なことなのだろうか。いやそうあきらめる前に、私の場合、立場を変えてみることから出発した。つまり、学生の立場になってみれば問題がみえてくるのでは、と。なぜ専門（学問）に関心がないのかを問うてみる。考えられることは、専門はつまらない、専門は難しい、自分とは関係がないこと、または専門の意義を見いだせない、などがあげられる。従って、専門をおもしろく感じないのはなぜか？なぜ難しいと感ずるのか？なぜ自分と関係ないと考えるか？専門を学ぶメリットとは何か？こうした問題を解決するプロセスにおいて、学生が自らの意思で本気に専門に関心を持つに至る鍵が隠されていると考えられる。

以下では、こうした問題に対する解決策として、自問自答しながら、学生の胸を借りながら、日々ゼミや授業などの教育の現場で実践している幾つかのエッセンスについて紹介したい。そのエッセンスとは、大きく分けて二つあり、一つは専門に学生の関心に向け

させる導き手、つまり教師の姿勢について、もう一つは、ある専門に学生の関心を引きつける方法について、体験的に論ずる。

一、専門への導き手としての教師の姿勢について

まず第一は、教育者としての情熱や信念が問われていること。なぜ学生に自分の専門とする分野に関心を持って欲しいのか、明確なメッセージなり、パッションがあるのかどうかである。教壇に立つ前、いつも「学生諸君に伝えたいメッセージは何か」を問うことにしている。学生に話す前に自分は感動しているのか？あるいは、震えるような情熱をほんとに感じているのか？これが感じられなかったらメッセージも心まで響かないと自分では思っている。また、今日の一言で、もしかしたら眠っている学生が目覚めてくれるかもしれない。そんな期待もある。麗澤大学の創始者が強調されている「知徳一体の教育」はそんな私を勇気づけてくれます。その根幹に流れているのは、人間愛の精神であり、慈愛のこころと思います。学生が豊かな品

性をもつ人間として社会に育って行って欲しいという真剣な心や強い信念がなければ、専門に関心を持たせることも、私のメッセージも虚しいものとなります。

第二に、教師である前に人間であれ。とかく大学で教鞭をとると、専門知識が「売り」が故にその呪縛に捕らわれがちになる。専門という高きところから学生をみるのではなく、学生と同じ人間として接することになっている。同じ人間として、専門がどれだけの人間的な肥やしとなるのか、共に考える事で学生との一体感も生まれる。また、より魅力ある人間に磨いていくということでも使命を感じる。人間として自分はどうなのか絶えず問われている気がする。私の夢は、たとえ日本丸がタイタニックのように沈んだとしても、世界で泳げる人間づくりだ。別言すれば、"ハートの熱いたくましい人間(Global Action with Humanity)"、づくりである。これは学生に対してだけでなく、その前に私自身がその夢を実現・実践するという宣言でもある。

第三に、教育と研究はトレード・オンにすべき。授

業の準備に時間がとられ、研究が犠牲になる、とグチをこぼすことがある。大学における教育と研究は本来的にトレード・オフなのだろうか？ もしそうであり教育よりも研究を重視するならば、何も大学ではなく研究所の方がましなはずである。それは学生にとって。なぜなら、大学は（社会に送り出す最終段階での）人づくりの現場であるからだ。私は教育と研究をトレード・オンにすべきだと考え、日々この方向で脳ミソにも身体にも汗をかくようにしている。大学が人づくりの現場であれば、研究もそれに寄与しなければ虚しくなる。研究活動を行なう事が教育を受ける学生に刺激となり、また逆に教育の現場で問題提起されたことを、研究してそれを深めていく、といった好循環が期待できると確信している。

二、専門に学生の関心を引きつける方法について

第一に、自らの専門を突き放せ。自らの専門分野に私自身が燃えることは常に大切と思っているが、当の学生は意外と冷めている。こうした温度差があること

をつくづく実感している。これをクリアするにはどうするか？ 学生が飛びつきやすいところから入っている。例えば、新聞報道とか最近の雑誌とかなんでもよい。例えば、講義で「サービスとは何か」というテーマを議論する場合、サービス理論から入るのではなく、最近の話題から入る。ある雑誌の特集として、女性が選ぶ本物のサービスとして、満足度調査があり、ベスト一は、ディズニールランドである、なんて紹介すると眼の輝きが違う。そこが専門への入口と考えている。

また、体験談も効果的である。例えば、BC市場・通貨統合を語る際、ヨーロッパ・ドライブ旅行での印象から入ると、身を乗りだしてくる学生もいる。さらに、学生自らが体験もしくは疑似体験することも専門への糸口となる。経営という専門分野では、バーチャル的に教室で会社をつくってみることも刺激となる。英語経営書講読の授業では、英書で書かれた経営のエッセンスに基づいて、学生が会社（五〜六名で構成）をつくって学んでいる。最終授業では学生による手作りの会社からプレゼンテーション（一九九八年度後期は戦

略づくりについて)が予定されている。

第二に、専門を学ぶことは自己変革につながることを学生にアピールする。学生が専門に無関心心ではなく、ただ眠っているだけだと考えている。そうした休眠学生をどの程度目覚めさせるか、これが自分に課しているチャレンジだと思っっている。どうしたら、学生は目覚めるのか? 専門を学ぶことは、そこに自分が関わっていること、そして自己をよくみつめ、問うことによって自己変革(人生観、職業観など)につながることを一貫して講義で語りかけることが、「目覚め」のキッカケになると思う。

第三に、学問とは問うことなり。学生は小さい時から知識を詰め込むことに慣らされ、いつの間にか、それが勉強であり、専門分野を学ぶことであり、それが学問であると思いつ込んでいないだろうか。これが学生の大学教育に対するイメージであれば、私はこれに真っ向から反対する。専門を学ぶということは、専門知識の詰め込みではなく、まず「問う」ことがその出発点と考えている。「問い」のない専門は面白味

がない。それは学生だけでなく、私自身もそう思っている。大場ゼミでは、まさしくこの原点に立脚して学んでいる。「問い」を発見しそれを皆で議論し合いながら解決案を練るのである。“Why?”を重視する問題発見・問題解決型学習と呼んでいるが、このプロセス(「脳みそに汗をかけ」と学生には言っている)を通じてごく自然に専門に関心を抱くようになる。そしてその成果となる作品のひとつが卒論と呼ばれるものになる。

第四に、学生との対話を重視する。私の場合、一方通行的な講義とは無縁である。専門知識の押し売りをしたくないためである。また、講義は学生のためであり、学生と共にクリエートするという意識が強いためである。ではどのように対話しているのか? 講義ではあらゆる手段を用いて学生と対話するように努めている。例えば、クイズ(学生からテストとの違いを指摘されたこともある。両者に違いはなく、要は精神的プレッシャーを取り除くという意図がある)をよく行なう。また、あるテーマについて、意見を聴くため

によく教室を歩き回り、インタビューする。さらには、ディスカッションやディベートなども取り入れる。今期の国際比較産業論では、産業の空洞化問題について、まずビデオで空洞化の実態を垣間見ながら、促進派と阻止派に分かれてディスカッションを実施した。寒い？ジョークも対話の促進剤と考えているが・・・もったも、学生数が多い授業ではこうした直接的な対話だけでは困難なので、間接的な対話、つまりレポートやメモを通じて対話するようにしている。また、学生一人一人の個人ファイル（レポート、クイズなどを個人ベースで保管）を作成し、それをベースに受講生に共通するテーマについては講義でフィードバックしている。さらに、最終講義ではいつも学生に自己評価クイズを行なうと同時に、講義内容について私も自己点検を行い、来期に向けての講義のあり方についても学生から意見を聞き、講義の進め方について学生と共に、カイゼン運動をすすめている。これも対話重視の反映と想っている。

第五に、なるべく学生の言葉で専門を語れ。専門用

語のことを英語では jargon と呼んでいるが、それに逃げ込みやすい。そうすれば、ますます学生は専門に関心をもたなくなるばかりではなく、専門嫌いにしてしまう危険がある。どうすべきか？ 専門用語のエッセンスをよく自分なりに理解して、学生の世界になるべく自分を置いて、学生の言葉で分かりやすく話すことに心掛けている。例えば、経済用語に機会費用という概念がある。重要な概念ではあるが、まともに言っても訳がわからない。そこで、学生に「君だったら（人気のある）アイスクリーム店で列に並んで、デートの時間を犠牲にしても待ちますか？」と質問しそれを考える事で、機会費用概念の真意が（この概念を持ち出さなくても）わかるようになり、その結果、専門への敷居も随分低くなると思う。

第六に、物事の本質追求の手段であること。今日のような情報化時代では、学生でもインターネットの端末を叩けば、情報はそれ程困難なく入手可能である。むしろ情報が氾濫しそれに振り回されているのが実情で、そうした情報をみる眼を養う事が専門を学ぶこと

に他ならないと考えている。うわべだけの情報に流されず、ものごとの本質を見抜くことが専門あるいは学問の究極の目的と思っている。そのためにも、専門を通じて議論を戦わせる。空洞化問題の本質とは何か、サービスの本質とは何か、情報化の本質とは何か、など本質追求が本物の人間を、そしてより魅力ある人間へとつくり変えていくと信ずる。

以上のことから、「関心を引きつける方法」あるいは「導き方」について言える事は、①専門はわからないという前提で学生と接する、②専門を学ぶ事のメリットを強調すること、③学生と共に講義をクリエイトすることなど、が肝要と考えられる。学生の反応が

あまりよくない場合、大学教育の現場の指揮者は教師だから、学生に責を負わさないで気持ち的に七〇八割はこちらに責任があるとみるようにしている。専門分野に学生が積極的にかつ喜びを持って学ぼうとするに至る、魔法の杖はないことを肝に銘ずる。学生が脳ミソに汗をかくには、それ以上に教師も脳ミソ、そして身体にも？ 汗をかく使命と覚悟がいる。

この小論を読んでいただき何らかの刺激となり、少しでも元氣が出ることになれば望外の喜びです。麗澤大学の教育実践が日本における、さらには世界における大学教育の新たな伝統となる日を夢見ながら。

比較文学の効用——そして麗大生のために

国際経済学部助教授 諸坂成利

今回私に与えられました課題は、麗大生の皆さんが将来を考える上で参考となるような話をせよ、というものです。また私の専門分野「比較文学」を如何に見出したか、その試行錯誤の道を語れ、というのも副題的に入っております。

しかし、今まで約四十年の人生を振り返って、残念ながら私は、あまり試行錯誤というものをしたことがない、比較文学をやろうと考えたのも、早稲田中学の二年生の時に、ブリタニカの百科事典で偶然この「比較文学」という言葉と出会い、この言葉が美しく思えたからに過ぎません。

私はそれまでは完全に理科系の人間でしたが、

当時早稲田中学が非常に文化的なレベルの高い学校だったことが私の判断に影響していると思います。それは先生方が「中学生だからこの程度だろう」とは考えずに、こちらが求めていけば、あるいは求めていなくても、国語でも英語でも様々な高いレベルの教養を与えてくれたからです。ちなみに私の音楽の知識は、中学一年からあまり進歩していません。ものすごく可愛い先生でした。出来の悪い生徒は、必ず殴られました。私は殴られたことはありませんでしたが、その授業は音大受験レベルの強烈なものでした。私ともう一人以外は、ほとんど理解できなかったと思います。

フランス文学やロシア文学との出会い、ショスタコーヴィッチやトリスタン・ツァラ、挙げれば切りがありませんが、私のすべてはあの早稲田中等高等学校の時代に獲得されたものです。高校二年の時には、「カミュとカフカ」という文章を書いて文部省から賞をもらいました。この時も数名の審査員が「高校生にこのような問題意識があるはずはない。誰か大人が書いたのだろう」と授賞に反対する意見もあったようですが、私の字のきたなさが、作者が子どもであることを証明してくれました。しかし私としてはそれはごく自然の問題でした。この時は学校賞というのも付いてきて、その時もらった時計は現在も早稲田中等高等学校の図書館の壁に埋め込まれているはずです。また同じ高二の時に、シュタイナーの『脱領域の知性』という本に巡り合い、アルゼンチン作家のホルヘ・ルイス・ボルヘスとロシア作家のウラジミール・ナボコフを研究するようになりました。早稲田大学の卒論でもこれをやり（四百字詰原稿用紙で四

百枚書きました）、いまだにこの二人の作家の比較研究をやっています。ですからパッと将来の研究を決めてしまっただけで、それをずっとやっているわけです。しかしこれは進歩がないというのではなく、私としては最初に、文学の世界におけるこの二つの巨星と出会ったことを幸運と考え、感謝しています。この二人と出会っていなければ、多分今のようなかたちで語学はやらなかったでしょうし、また比較文学のことも分からなかったと考えます。比較文学という学問は、間違いない言い方をすれば、文学の国際交流を主に研究する学問分野です。「文学」と聞くと皆さんはすぐに「役に立たないもの」と思われるかも知れませんが、実際は文学ほど役に立つものはありません。特に比較文学は、大変役に立つと言っていると考えます。もし私が比較文学者でなければ、日本のことも、世界のことも、また日常的に我が身に降りかかる様々な出来事への分析も、多分今のようにならなかつたと思われまふ。私は早稲田にいるときも、麗澤に

来てからも、判断を間違ったことは一度もありません。それは私の内部の Comparative Mind が私に作用しているからです。したがって、私が学生の皆さんに申し上げたいことをひとことと言えば、「Comparative Mind を持て！」ということに尽きます。しかしこの偏らない、複眼的な、心の持ち方、物の見方が、世界から、そしてこの日本から現在急速に失われつつあることを私は感じます。

例えば私は授業で学生に、「日本にいるときは日本語を」という話をします。柏で外国の方に英語で話しかけられたら、普段の日本語ではなく、意識的に正確な発音で、美しい日本語で、例えば「どうされましたか?」とか訳かなければいけない。もし私がパリにいて、至る所で人々が私に日本語で話しかけてきたとしたら、当然私はパリに魅力を感じなくなるでしょう。しかし現実には、パリには英語が溢れ、別の意味で危機的状况にあります。もし私がただの英文学者だったら、こういう考えには思い至らなかったかも知れません。また

私は「灰皿があるからといって、そこでタバコを吸えると思うな」とも言います。これは最近は、少し改善されたと思いますが、一学期のある日、クラスを出るとすごい煙で、私はすぐに学生たちに Comparative Mind が足りないと感じました。

周りのことを何も考えていない。▲田舎者▼のすることです。灰皿があっても、そこで二十人が吸っていたら煙の暴力が生じます。もし暴力がなくならないのであれば、別の処置を考えなければなりません。タバコを吸うことがそれだとは申し上げませんが、もしそれが人間の自然の欲求であるとしたら、それを押さえる処置は不自然なものになるでしょう。そして不自然な処置はまた別の不自然な問題を起こすことになるでしょう。皆さんはこれから社会に出て、そこで活躍されるわけですが、そこは不自然な処置から派生した様々な問題で満ち満ちているはずで、では、どうすればよいのでしょうか。

まず、真っ先に申し上げたいことは、自分が何

で食べていくのか、自分には何が出来るのか、その準備をまずやって欲しいということ。社会は基本的にプロの世界で、その傾向はこれから益々強まるでしょう。金融ビッグバンですから。金融ビッグバンとは原理的には「日本一！」という言葉が死語になることを意味します。ここが世界になるわけです。アメリカのある自動車会社の会長と、その運転手の給料は、三百倍違います。ところが日本の場合は三倍しか変わらない。これは変わってくると思います。変われないのであれば滅びなければならぬ。ですから考えようによっては、これはめったにないチャンスの時代を生きることになるわけで、あき時間にキャッチボールやサッカーをしているひまはないということになります。もちろんそれで将来食べていくというのであれば、話は別ですが。

それからもうひとつ、これも真っ先に言わねばならないことの一つですが、麗澤大学で四年間学ばれると、一方で非常な、他では得られないメリッ

トがある、と同時に、他方ではデメリットもあるということ。先生方と親しく接することができ、またお友達とも大変仲良くなる事が出来る、特に良い友達に恵まれるというのは、麗澤大学の最大のメリットです。ところがここにいと、通常の人間の発想と全く逆の発想をするようになる人もまた沢山います。多分大学の規模が小さい、その他の理由のために、そうなるのだろうと考えますが、そのデメリットを克服するために、麗澤大学では留学制度が充実している、というのが、私の個人的な、私の内部での留学制度の位置づけなのです。つまりある仕方、ここは鎖国状態にある。皆さんの生活を振り返ってみて下さい。大

学、寮、ローン、マツキヨ、この繰り返しではありませんか？ 通学している学生の生活も似たり寄ったりです。大人はともかく、若い皆さんにはもっと刺激が必要です。自分のやりたいことを見つげるためにも、また頭を鍛えるためにも。

「日本の常識は世界の非常識」と言った評論家が

います。私はこの言葉を単純に受け入れません。「イギリスの常識は世界の非常識」と言える場合も多々あるからです。しかしもしある社会が鎖国状態を長く続けていたとすれば、人間や社会に対する基本的なある認識を逆転させなければ社会を維持することは出来ません。そこでの前提は、「すべてがうまく行っている」というものです。すべてがうまく行くわけではない。当然です。問題がおこった中学校で校長がインタヴューを受けて、「学校でイジメはありましたか？」と問われます。「そんなの、どこだってあるでしょ」と答えてはいけない。「うちの学校にはイジメはなかった」とそう言わなければならぬわけです。こういうった社会では、悪いことをした人間よりも、悪いことをしている人間がいると言った人間が、何も悪いことをしていないのに罰せられることになります。くさいものには蓋をする、出る杭は打たれる、というわけです。私が例えば一人芝居をします。チラシを作って宣伝する。ところが、蓋をあけてみると客が数

人しかいない。通常であれば、自分には人気がない、もっと勉強しなければ、と思います。ところが麗澤にいと次のような感覚が芽生えてきます。こんなに練習したのに、なぜ人々は自分を評価しないのか、と。いわゆる「甘え」です。客が集まらないこと、魅力がないことを他人のせいにして、自ら反省することがなくなるのです。点数は足りないけど、自分なりに一生懸命勉強したから単位をくれというのもその類です。

私は「伝統の日」で毎年、廣池千九郎讃歌交声曲『稀人』という曲を指揮します。指揮者の仕事は、スコアを読むことも重要ですが、音符という記号しか与えられていないので背景を知ることにも更に重要な作業です。

最初にこの曲を手掛けたとき、私は何度も記念館に足を運び、皮膚感覚でこの人物を感じようと思いました。いまだに多くのモラロジアンの方から資料をいただいたり、話を伺ったりしています。ですから私は、モラロジアンではありませんが、

モラロジのことは少しは知っているのです。私の理解するところ、この発想の逆転は、モラロジに反します。小さいものには蓋をする。出る杭は打たれる。そこには「慈悲」も「寛大」も「自己反省」もないからです。ですから留学と同様に、小さな世界から脱却するために、皆さんも授業以外にもモラロジを勉強されたら良いのではと思います。またモラロジをきちんと勉強すれば、留学は必要ないとも言えます。それは必ず、私の言うComparative Mindにつながる性質のものだと考えます。

ある先生の教え方がよくない、と学生が私のところによく文句を言いに来ます。しかし君の授業の受け方はどうなのか。私は必ず学生にそう訊きます。五十人の学生がいれば五十通りの学び方が存在します。Comparative Mindのある人であれば、必ずこの視点に気付くでしょう。留学してもこういった視点が得られなければ、留学の意味は逆にほとんどなかったのではないのでしょうか。仏

文学者・哲学者の森有正は、私の言葉で言い換えれば、鎖国状態の人間関係では、「私」というものがなく、人間関係は「あなたとあなた」の関係になる、一方ヨーロッパでは人間関係は「私と彼」の関係であるというようなことを述べています。「あなたとあなた」の関係は、許し合い、傷つけ合い、復讐する世界です。日本はこれが得意です。歌舞伎を見れば分かります。またこの関係は、現在ヨーロッパにも浸透しつつあります。世界中が、交流しているかに見えて、実は現在、鎖国化が進んでいるのです。傷つけ合う世界が進行しているのです。

一度傷ついた心は、なかなか癒せません。みなさんも信じていたお友達から直接悪口を言われるならまだしも、ウラで悪口を言われてそれが自分の耳に入ってきたときにはその人を許せないと思うでしょう。この心の傷、あるいは癒しの問題は、環境問題と似ています。木を切ってしまうと、元と同じ木に育つまで何百年もかかったりします。

人の心も同じです。癒しには途方もない時間がかかるのです。だから問題は、いかにして傷つけな
いか、問題を発生させないようにするか、になります。
ます。その指示は、当事者には出来ません。適材
適所を見出す一人の《紳士》の手に委ねられねば
なりません。でも、もし傷つけようと思ったら、
相手を一生敵にする覚悟でやるべきです。最も賢
い選択は、傷つけないことなのです……。

まだまだ申し上げたいことはたくさんあるので
すが、もうやめなければなりません。話があれば
個人的に訊いて下さい。それから、皆さんは将来
のことは少し忘れて、まず今はやはり勉強するべ
きではないでしょうか。勉強してある段階に達す
れば、将来を見る目も変わります。トータル四百
点の人と六百点の人とは、このキャンパスは同
じに見えても別の世界に住んでいることになりま
す。

『論語』の冒頭は、孔子の、いわば歓喜の音楽で
はじまります。あまりに有名な言葉なので引用は
当然ためらわれますが、そこで孔子はよろこびに
うちふるえています。皆さんもいつも何かを考え、
正々堂々と学んでいなければなりません。授業に
出席しているだけでは駄目なのです。

最後に今回のこの機会をお与え下さった、水野
先生、黒川先生他編集委員の先生方に感謝します。
どうもありがとうございました。

(本稿は黒川洋先生の「道徳科学」の授業(一九九八
年十一月三十日)にゲスト出演した折の原稿を元に作成
された)

△麗大を支える人々▽

我が師を語る——我妻和男先生のこと

あずま

国際経済学部教授 竹内啓二

私は麗澤大学外国語学部イギリス語学科を一九七

八年に卒業してから筑波大学大学院に進んで以来、

近代インド思想を専門として研究者の道を歩んでき

た。その筑波大学での修士論文の指導教官が、我妻

和男先生であった。先生はその後、麗澤大学外国語

学部教授とられた。私は母校の大学で教鞭をとっ

ているので、学生時代の自分を知っている多くの師

に見守られているようなものである。しかし、それ

だけではなく、自分の修士論文の指導教官であった我

妻先生が同じ大学で教えておられ、何かとご指導い

ただけのものはありがたいことである。

筑波大学での出会い

我妻先生と筑波大学で出会うことになったいきさ

つからまず語っていききたい。

私は、大学四年になって、比較文化研究をしてみ

たいと思って、いくつかの大学院を受験した。その

結果、筑波大学の修士課程地域研究科に合格するこ

とができた。この修士課程は二年間の過程で、二年

目には修士論文を仕上げ提出し審査を受けること

になっていた。比較文化研究というと、大きくは東

洋文化と西洋文化の比較研究が考えられる。麗澤大

学のイギリス語学科で、西洋思想や西洋文化につい

ては学んでいたもので、今度は東洋の文化を勉強して、比較をしたいと思っていた。そこで、インドを専門とされている我妻先生に指導していただいて、インドについて修士論文を書こうと思ったのである。

我妻先生は、筑波大学の地域研究科では南アジアの言語や思想、哲学思想研究科博士課程では比較文化、学部の比較文化学類ではアジア概論、南アジアの歴史・思想・文化について教えておられた。また、ドイツ語およびドイツ音声学なども教えておられた。というのも東京大学の大学院で、インド哲学とドイツ語・ドイツ文学課程を別々に修了されたからである。

筑波大学の地域研究科では、インド思想を修士論文のテーマとして選んだ者は私のほかには誰もいなかった。先生からヒンディー語やベンガル語の基礎を学び、特に、ベンガル語については通信教育のようになして懇切に教えていただいた。先生から勧められた修士論文のためのテーマが近代インドの父といわれるラムモホン・ライ（一七七四〜一八

三三）の思想であり、ラムモホンが残した著作が英語の外にベンガル語でも書かれていたからであった。

ベンガル語は、基本的な文法などを教えてくださった後で、次のようにして教えていただいた。私は、タゴール（一八六一〜一九四一、ノーベル文学賞をアジアで初めて受賞したインドの詩人）が作った小学生用のベンガル語のテキストを使って、少しづつベンガル文字をノートに書き移し、辞書を引いて、単語の意味や文法的なことを書きながら訳していった。それを先生に郵送したら、しばらくすると、ていねいに赤ペンで誤りを直してくださって返送されてきた。それを見て間違ったところなどを勉強するのである。

麗澤大学の図書館に掲げられている「経をもって経を説く」の言葉のとおり、思想研究においても、資料をそれが書かれた言語によって直接読み込むことが大切である。そこで地道な言語の学習が必要となるのである。先生のご指導のおかげで何とか辞書を引きながらベンガル語の文章が読めるようになって

ていった。

二年目に入って、修士論文の作成にかかると、時折、先生は自宅に呼んでくださり、いろいろとご指導くださった。お伺いするといつもお食事をご馳走くださり、三時間ぐらいはすぐになたってしまった。

修士課程を終えてからどうするかと考えていたころ、先生からインドに留学して博士課程で学び、博士号を取得してきたらどうか、というお話があった。

しかも先生自身がかつて日本語と日本文化を教えてこられたタゴール国際大学へ留学しないかということであった。麗澤大学の先生方に相談する一方で、我妻先生からは、タゴール国際大学の案内書や先生が滞在していた頃の写真を見せていただいたり、当時留学していた日本人の学生に詳しいことを尋ねるよう連絡をつけていただいたりして、次第に留学へと決心が固まっていた。留学のための手続きの仕方までご指導していただき、修士課程修了後、半年ほどしてインドへ留学することができた。

タゴール国際大学での先生

タゴール国際大学では、我妻先生の名前は知れ渡っていた。私は先生も学んでいたティワリという先生からベンガル語を個人的に教えていただいた。ベンガル語で書かれた資料を英語に訳して行って、それをティワリ先生に直していただくという方法で資料の読み込みも行った。ティワリ先生から我妻先生の猛勉強ぶりをうかがった。とにかく、ベンガル語もしくはヒンディー語しか話さず、休みになればベンガルの村々をめぐるっておられたとのことである。先生が滞在していた頃、ちょうどナクサライト運動とあって、毛沢東思想に基づいた過激派の武力闘争がベンガル各地で勃発していた。先生は村の学校などに寝泊まりしながら、今度はどこが危なくないといった情報を手ししながら、村々をめぐるたそうである。当時の先生の写真を見せてもらったことがあるが、ずいぶん痩せておられた。田舎にあるタゴール国際大学では、肉類を手に入れるのが難しい。先生が痩せておられたのは、ほとんど菜食に近い食事と厳し

い暑さの中の猛勉強によるものであろう。

先生は務めていた横浜国立大学を途中から休職してタゴール国際大学日本語学科客員教授として赴任されたのであるが、結局予定より長くインドに滞在されたために、横浜国立大学での職を失うことになってしまったそうである。

インド滞在中の中間の一年半ぐらいは、奥様とお子さんもいっしょにインドに滞在されたそうである。奥様はインドの子どもたちとともにベンガル語のクラスで学ばれ、小さかったお子さんは日本からのお客様さんがあると、リキシャ（自転車に座席をつけたようなインドの庶民の乗り物）と一緒に乗ってはベンガル語で指示を与えキャンパスを案内したそうである。

先生の最近の活躍

先生のベンガル語の力はすばらしいものである。

『タゴール著作集』（第三文明社）全十一巻と別巻（タゴール研究）の編集をされながら、長編小説

『ゴーラ』をはじめ、ベンガル語の原本から多くの

作品を翻訳された。また、逆に、タゴール国際大学への初期の日本人留学生や日本人教師についてベンガル語で本を執筆し、出版された。ベンガル語で本を出版した日本人は、我妻先生以外にいないであろう。しかも、ベンガル人には分からない日本語の手紙などの資料を用いてタゴールと親交のあった日本人についてベンガル人に紹介された意義は大きい。

ベンガル語はインドの西ベンガル州の言葉であるばかりでなく、バングラデシュの国語でもあるが、先生は、バングラデシュの首相が来日された時には、通訳をされた。インド大使館・バングラデシュ大使館との親交も厚く、度々要請を受け、文化交流のために尽力されている。

先生はタゴール国際大学に日本学院を設立するための委員会の事務局長として、インドにたびたび行き、ねばり強くインド政府当局とも交渉された。そのようなご苦勞のおかげで、一九九二年に日印の学術文化交流の拠点である日本学院の建物が建設され

た。日本学科の授業もここで行われている。それはタゴール国際大学に学んだり、教えたりした多くの日本人の願いでもあった。というのも、日本学院ができるまでは、日本語の教室も図書室も中国学院の片隅に間借りしていたからである。タゴール国際大学に関係した日本人は、経済大国になっても文化的なことには力を入れない日本政府に情けない思いをしていたのである。我妻先生の働きがなければ、いまだに日本学院はできていなかったに違いない。また、インドで最初にできたタゴール国際大学の日本学科は、四十年間、一年間や二年間の日本語コースしかなかったが、ついには一九九九年から学士の学位がとれるコースが開設され、引き続き修士の学位がとれるコースが開設される予定である。これについても我妻先生のご尽力があった。

先生とインド訪問

一九九七年の三月に我妻先生といっしょにタゴール国際大学とカルカッタを訪れ、しばらく滞在する

機会があった。先生は前述したベンガル語による本の執筆のほか、タゴールと親交のあった日本画家、荒井寛方の記念碑の除幕式のための仕事や日本人の学者の講演のお世話など、いくつもの仕事をかかえておられた。私もいろいろとお手伝いをさせていただいたが、先生はまさに「水を得た魚」のように、活躍されていた。

先生は、忙しい仕事の合間をぬって、いっしょに連れてきていた麗澤大学の学生とともに、夜に、村へ案内してくださった。インドのミルクティーをごちそうになりながら、土造りの家の外でベンガルのバウル（放浪の吟遊詩人）の宗教的歌を聞かせていただいた。近所の人たちが、集まってきて、中には木の上から聞いている人もいた。おそらく、我妻先生も若かりし頃、村々をまわっている時に、いくどもこんな風に歌や演奏を聞いたたり、いっしょに歌ったりしたに違いないと思った。

また、前述の荒井寛方の関係者グループとともに近くのつば作りの村に連れて行ってくださり、村人

たちとの文化交流会を開いてくださったことも忘れがたい。こんな時によく私にはタゴールの作詞作曲した歌を歌ったり、詩吟をやるように言われるが、この時は、タゴールの歌を村人も交え何人かで歌った。

インドと日本のかけ橋として

先生はよく冗談で、「私は日本に住んでいるインド人です」と言われる。ベンガル語で自由に話される先生に、そうベンガル語で言われれば、日本にいるインド人もすっかりそれを信じこむほどである。

ほとんど休みごとにインド、その中でもタゴール国際大学とカルカッタへ行かれる。一九九八年の一月には、インドのタゴールに関する権威ある協会、ロビンドロ・パロティ・ションスタよりタゴール賞を受賞された。永年にわたってタゴールの研究と普及に尽力されたこと、タゴールを中心とした日印文化交流についてのベンガル語の著作、四〇回近くになるタゴール国際大学やカルカッタのタゴール大学の

訪問と交流などの功績が評価されての受賞である。

この受賞をきっかけとして、インドのテレビ局で我妻先生のこれまでの歩みと現在の活躍のようすを描いたドキュメンタリーを作成することになった。

インドから撮影スタッフがやってきて、先生の今までの歩みにゆかりのある所で撮影が行われた。廣池学長も我妻先生に関するテレビ局のインタヴューにに応じてくださった。先生が撮影スタッフの言うがままに歩かされているのが何か微笑ましく思えた。

先生は一九九八年五月に設立された「日本タゴール協会」の事務局長として文化交流に尽くしておられる。また、先生の発案で、千葉県に住むタゴール国際大学で学んだり教えたりした日本人の集まりである「千葉タゴール会」という小さな会ができていく。その創設の会合の時、一番動けそうだったというところで、私がある会長に選ばれてしまった。実際、我妻先生の声がかかれれば集まるという会で、私は名ばかりの会長である。

先生も奥様も本当に多くの人の世話をされている。

何人のインド人が先生宅に滞在し、奥様のインド料理をご馳走になったことだろう。また、先生のお世話によって、何人ものインドの学者や音楽家や舞踏家が日本に来て、講演や演奏などを行った。私も、先生を通じて多くのインド人学者の講演の通訳などをさせていただき、交流を結ぶ機会をいただいた。大学のゼミなどでは、温和で真摯な先生の人柄に学生も信頼を寄せていることであろう。冗談っぽく楽しそうに話されるお話にも先生の深く広い学識が散りばめられている。

先生の研究上のご専門は、タゴール学、日印文化交流史、東西比較文化で、翻訳は、ベンガル語、サンスクリット語、パーリ語、英語、ドイツ語、フランス語などから日本語へ、日本語からベンガル語、ヒンディー語、英語へとなされたものが多数ある。川端康成の作品もベンガル語に翻訳されている。私は今も学生時代と同じように、学問的にも、人間的にも多くのことを学ばせていただいている。先生のご健康とますますのご活躍を心よりお祈りしている。

広池学園で学んだ私の剣道

剣道範士八段
麗澤大学剣道部師範

堀ノ内 勇吉

(1) 剣道のはじめ

国、内外の状勢多難な大正八年八月（一九一九）に鹿児島県の農家で長男に生まれました。当時、長男は家督相続の義務があつてそれだけに父母、祖父母共に喜んだようです。

幼児の頃は虚弱児だったようです。当時は強健な気力体力が要望される情勢で、両親は心配して小学校に入ると同時に剣道を強制しました。いまのように立派な剣道場ではなく、教室の机、椅子をかたづけただけにわか道場です。稽古中に割れていた床に左足を突っ込み、その大きかった傷の跡が今なお残って思い出になります。厳しい稽古でした。剣道がいやでたまらなかつ

た当時が偲ばれます。学年があがるにしたがつて艱難辛苦に耐える気力体力が増し、剣道が面白くなりました。

紆余曲折しながら海軍・大東亜戦争の渦中に死線を越え生かさせて戴き、生命の不思議な運命に感謝のほかりません。八十路を迎えてなお剣道が続けられ、両親への感謝で一杯です。

(2) 麗澤大学との出会い

昭和四十二年、夏の剣道合宿のとき、柏市剣道連盟より廣池学園剣道部から指導者の要請があつたので行くように指命されました。高度な勉強をされる学生の

皆さんに剣道について指導ができるだろうか、思索しました。剣道は考えるより実践だといわれ、昭和四十二年十月廣池学園を訪ねることにしました。

学園の守衛さんのところで入門の手続中に、部屋に掲げてある次の掲示が目にとまりました。

「麗澤は太陽天に懸りて万物を恵み潤ほす義也」

解説に「麗澤とは太陽が光明（知恵）と温熱（慈悲）とをもって公平無私に上下四方を融和し万物を生成化育するという意味で慈悲の根本精神に通ずる言葉である」とありました。早速手帳にメモしながら、一瞬、立派な学園だなーと胸が躍りました。暫く歩きますと向こうからご婦人が見えました。四、五メートル位の所から「今日は」と挨拶をいただきました。長年挙手の礼が身に染みこんでいましたので、しばらくして「今日は」と返礼いたしました。この瞬間子供の頃、母が道端で見知らぬ方とお会いしても「こちらから先にご挨拶するものだ」と教えられていたことが脳裏をかすめました。一瞬母に出会ったような気持ちになり勇気づけられました。

剣道場に参りますと学生の皆さんに懐かしく出迎えて戴きました。東京方面の大学では学園紛争のさなかだけに皆さんが学業に剣道に一生懸命なのにしたのもしく思いました。学園を尋ねて喜びの第一印象です。一緒に勉強しようと思いました。

(3) 文部省の資格試験に挑戦

占領軍により禁止されていた剣道が解かれて昭和二十七年に全日本剣道連盟が発足しました。文部省では学校教育に武道の指導者を養成することになりました。指導法のライセンスを持たない私にとって取得の希望が沸いてきました。出題範囲が広く四十歳の手習いではとてもむずかしいと思いましたが、「努力に勝る天才なし」という言葉をかみしめてライセンス取得の勉強に努めました。毎朝NHKのラジオ放送で哲学、心理学、東洋史、西洋史、等教育法の講座の資料で、朝の放送をテープに納めて勉強しました。私の教育実習と違ってそれを学生の皆さんに聞いて戴き自信がつかしました。剣道の修練で得た集中力で資格試験二回目で

合格することができました。ライセンスを手にしてその喜びはひとしおでした。正しい剣道の指導ができるよう一層勉強に努めました。

(4) 剣道祭で、心技を学ぶ

毎年五月一日から八日まで京都市岡崎の武徳殿で剣道祭が行われます。また剣道の昇段審査も行われます。今年で四十六回になります。全国の剣士が津々浦々から集まります。私も一年間修練した業を披露し、自分の師に、同僚に見てもらい結果を聞いて、自分の剣技に反省を加え、学生指導教材にしました。光陰矢の如くで、京都大会参加も無欠席で三十二年になりました。この積み重ねが剣道八段への合格にもつながったものと思います。

。武士道の教え

① 自己の最善を尽す（正義）

② 相手を尊重する（礼節）

③ ルールを守る（信義）

。剣道は肌で覚える、聞いて覚える、目で覚えるとい

うことです。

「見ることに聞くこと心から

悟りなり迷いなり」

という剣聖の言葉に教えられ剣の道の修練に励んでいます。

(5) 勝海舟の剣の修練

剣は人を打つものではなく、また少しでも勝とうという心があつてはならない。剣は人を打つものではない、少しでも勝とうという我があつてはならない。静かなこと林の如く、疾きこと雷の如く、人と争わず打手の心を奮って我が剣の上に置けば敵は自然に畏縮して勝つことは自由である。

これに反してただ勝とう負けまいとの一念から心を争いの利不利の上のみ置くようでは到底剣道の真髄を得ることは不可能である。剣道を学ぶには皆孔子、孟子の書を熟読させてその心理を剣道に応用させればこれ以上の教えも修業もない。

剣禅一致、「心正しからざれば剣正しからず」いま

の世間一般の剣道は形ばかりを学んでいるが、あれでは男として一生の大事には役に立たぬ。よく心魂を練り大変に直面して少しでも臆することのないように心胆を練磨せよ。思いとして大変に臆せぬ心は時代に開わりなく最も大切であろう、その心を納めるのが真の剣道である。

そのために平生正しく行動をとれ天地神明に恥じぬ行動こそ臆することなき心の大元である。大難に直面してこれを突破する時身命を捨ててかかる心の剣である。勝とうとか防ごうとか考えると気力が畏縮して相手に乗せられる。

勝海舟はこの真理を体得して己の身命は勿論、徳川三百年の主家をも捨てて真に日本国のためになる正しいと信じた事に向かって虚心坦懐^{たんかいしゆく}々々として事を処理した。

日本が外国の植民地にならず近代国家に成長できたのは勝海舟の働きによるところが大きい。この剣道修練による働きに強く心をうたれました。

(6) 啐啄^{そったく}同時の機

学生にとっては監督は家庭の父にあたり師範はオジイさんに当たります。おじいさんは自分の体験を通じて孫たちに剣道を語りかけます。父親はこどもを育てる義務と責任があるから監督は学生たちに汗みどろになって精進し苦楽を共にします。そこには親子の情愛のような師弟の敬信の情が生じます。おじいさんはいわば剣友であって師弟と言われるほどの堅い結びつきではありません。

道元禅師のことばに「啐啄^{そったく}同時の機」というのがあります。禅の師弟の姿だそうです。ひよこがかえるとき卵の中から小さな口ばしでひなが「出しておくれ」とつくと親鳥が機を逸せず「出ておいで」と外から殻を突いてヒヨコが誕生します。

禅の修業の師弟の姿はまさに「啐啄^{そったく}同時の機」であるといわれています。剣道の師弟の関係もこうであります。学ぶことはまねることから始まります。師匠の言うとおりの師匠のする通りにして師匠に一步でも近づきたいというのが望ましい姿でありました。昔はすぐ

れた師を求めて入門したものであります。私も東京の野門道場に一〇年毎朝四時起きして師の教えに心を純粹にして耳を傾けました。

弟子は師を尊敬し師は弟子を愛し師弟は信頼で結ばれました。日本の剣道は師弟の結びつきによって発達してきたものと思います。私は今でも亡き師のおかげで八段の剣が峰を踏破できて良い師と巡り会い、感謝と幸せ一杯です。

(7) 一二〇秒にかける剣道八段

★剣道八段試験について

新聞紙上に「ひよっとすると日本で最も厳しい試験かも知れない」、また「東大より低い合格率」という記事が過去に掲載されました。最近ではNHKのテレビで剣道八段を目指す方々の修練の状況ならびに青年の指導法等について放映され、社会に大きな反響を及ぼしました。

剣道八段の受験の条件は年齢四十八歳以上、剣道七段取得後八年以上となっています。この二つの条件を

満たしたうえで各都道府県剣道連盟の予備試験を経て県剣道連盟会長の推薦を受けなければなりません。この厳しい条件を通じて京都の本試験です。

千葉県は古くから剣豪の千葉周作をはじめ鍊達の剣士が多いところです。剣道の先輩から八段の受験を進められました。大学の師範もさせて戴いており受験することにしました。

昭和五十三年四月、はじめて千葉県の予備試験を受験、受験者十六名、京都の本試験とおなじ形式で審査員七名、対戦はA B、B C、C D、D Aの順でおこなわれました。審査員五名以上「合」の印がなければ不合格です。結果は不合格でした。良い試験をあたえて戴き感謝して頑張ることにしました。

★野間道場の朝稽古

講談社は文京区目白台にある出版界の大手です。構内の野間道場はながい歴史を持っています。剣道は剣道だけでなく世上全般の教えに通じているので剣の妙味を悟るならば剣道のすべてが真の人間完成につなが

るといふ教えに従って、初代社長が「道場は哲学があり倫理がある」として剣道を率先して奨励されました。日本中の剣士が朝稽古めざして毎朝七時から八時まで大勢参加しています。稽古は年間休み無しですが、ただ年末の二十五日から年始の五日までが休みになります。私は勤務先が近いので毎朝四時起床、朝稽古で剣技を磨くことにしました。

道場で一時間の余裕があり、埼玉からの方と二人で道場の拭き掃除、浴場、護国神社の清掃、雨の日も風の日も雪の日も、休まず己に厳しくと剣道の修業と改めて勉めました。七時の稽古始めまでに五十名余り毎朝集まります。七時から先生へ、かかり稽古切り返しの連続、自己に克つ修練を続けました。

昭和五十四年四月、千葉県の予備試験無事合格、京都市の資格を得ました。野間道場で流した汗が積りました。鍛えていただいた師、同僚に感謝の心で一杯です。本試験の京都で頑張るように、励まされました。

★本番の京都八段試験

京都では一次試験は実技、一次合格者が二次試験へ剣技円熟者同士の闘いです。更に学科試験、論文形式で行われます。合格者発表は翌日正午武徳殿玄関に掲示されます。

都道府県の予備試験合格者の受験者の受け付けはひきしまった顔と顔、おなじく緊張の連続、約五〇〇名が年齢、地域などのバランスを考えて四会場に配置されます。戦後占領軍による剣道禁止時代があったため高齢者も多く、私は若い方でした。

七人の審査員が風格、気位、姿勢、態度、理合、打突などに目を光らせ五名が「合」に丸をつければパス、三人以上が「否」に丸をつけると「また来年」となります。審査時間は一分、ながくて二分、何をどうしたかわからずに終わります。不合格です。ひきつづき昭和五十五年五月も不合格、相手に勝つことのみ考えて相手と対したことが原因でした。「心で相手の心を打つ稽古」を師から教えられましたが、夢中になるとわかりません。心って何だろう、迷いが続きました。剣

道は自分の動きだけでなく相手の動きによって自分の動きが決まるもので極めて複雑多岐なものです。剣道は平常の心を保てるよう平素の稽古に心がけることでした。

「心こそ心迷わず心なれ、心に心、心許すな」という歌詞にひかれ修練に励みました。

★二次試験に進む（一回目）

昭和五十六年五月の本番が参りました。

野間道場で試験に耐え不合格に目ざめ、ほのかな自信ができました。約五〇〇名の受験者で一次試験合格者、約五〇名。

念願の一次試験をパスしました。無心で二回の対戦、初太刀で遠間からの面が決まり二次試験に進むことができました。二次試験は二会場で行われます。一会場十五名の審査員です。剣道界最高峰の先生ばかりに審査をしていただけの幸せを感じました。二次試験は審査時間二分（一二〇秒）です。十五名中十二名以上「合」の丸がなければなりません。二次には剣技円熟

者ばかり、警察官あり、各大学の教授あり、この道の専門家あり、厳しい闘いです。はじめて体験する二次試験、緊張で無我夢中でした。この二次試験の実技終了と共に学科試験です。出題は「五輪書を読んで所感を述べなさい」。朝から緊張の連続で鉛筆を握っても手が震えて字になりません。深呼吸を繰返しながら心を静めまとめました。合格者は八段、翌日の正午発表、十三名合格。私は無念不合格「又来年」となりました。五十七年五月を目指してこの審査結果に修練の足りなさを反省。「肌で覚える」「聞いて覚える」「目で見て覚える」この三つを決め毎日一項目づつ朝稽古で記録反省を加えました。師に学びながら剣技の修練に励めました。また学生の皆さんとの稽古も八段審査の如く稽古しました。目標を定め稽古することは剣道人生「日日是好日」となりました。剣道の古文書を読みながらまだまだ修練のあまさに益々勇気づけられました。五十七年の五月がきました。千葉県の予備試験も心配なく合格する自信がきました。試験に臨む心構えも肚ができてきました。「継続は力なり」という言葉

も身に沁みて来ました。

★連続二次試験へ

前年二次試験を体験しましたので精神的な余裕ができました。一次試験も無事合格、二次試験まで進みましました。二年連続二次試験まで進むことができたので合格できるかも知れないという欲望が脳裏をかすめました。このようなことを考えてはいけなないと気持ちを静めながら、実技試験になりました。終わって学科試験は「猫の妙術について所見を述べなさい。」一二〇秒にかけて精一杯、剣が峰に手がとどきながら翌日の発表は不合格になりました。「また来年」の合言葉に都内の剣道場を尋ねることにしました。

「海軍の学校生活の五誓」

- 。至誠に悖るなかりしか
- 。言行に恥るなかりしか
- 。氣力に欠くるなかりしか
- 。努力に憾みなかりしか
- 。不精に渉るなかりしか

青春時代に思いを寄せながら頑張りました。険しい剣が峰の頂上に手のとどく所まで二回もよじ登った自負心のため心にゆるみがきて剣道がくずれ始めました。昭和五八、五九、六〇、六一年の四年間無理もあって、気管支炎、ヘルニア手術、腎嚢泡手術、中耳炎と体調をくずしました。試験の結果が「また来年」「また来年」と続き、受験について家族への迷惑を思うとき迷いが泉のごとく沸き、体力の限界も感じ、やめようと幾度か思いました。このとき師から剣道は段ではない、生涯人間形成の修練であるとさとされ勇気づけられました。

★三回目の二次試験（昭和六二年）

四年間のブランクを乗り越え三度二次試験に進みました。学科試験は「剣道指導上の問題点二つ以上あげその方策について述べよ」でした。翌日の発表また不合格「また来年」。

一茶の俳句を思い出しました。「タンポポや幾日踏まれし今日の花」。道端のタンポポを見ては幾日踏ま

れしと声をかけながら、タンポポに負けないよう七転び八起きしても頑張ろうと誓いました。要因は心の乱れと思います。

昭和六十三年五月は中耳炎のため競技体すぐれず不合格。試練は練達を生じ練達は希望を生ずるという言葉があります。剣道を通じて道を修行することは、試合に勝つことではなく剣を通じて人間形成をすることが剣道の目的と思いいながらも、このようなあたり前のことができないかと悔しくなりました。とらわれる心の迷いです。

★四度目に八段合格

一次試験四八〇名、四会場、審査員七名。組合せA、B、C、C、D、DのAのBにきまりAとCとの対戦になりました。よく説明ができませんが、ふりかえって無我の境地で審査を受けられたと思います。一次試験、二次試験共に一回一二〇秒に全神経を集中、無意識に相手の動きに対応できるという体験をしました。

心で相手の心をうつ剣かなと思っています。学科試験は「剣道指導上の問題点を二つ以上あげ、その方策について述べよ」。とられない心の修練をしたつもりですが、空を流れる雲のように千変萬化する心、生涯の修練と思えます。今回から当日合格発表になりました。苦雪十年目に剣が峰によじのぼることができました。これも家族の支援と大学の諸先生方あわせて剣道部OB、当時の学生の皆様のご声援に対し厚く御礼を申し上げます。当時を偲び感慨無量です。

麗澤大学で勇気づけられ多くのことを学ばせて戴きました。ありがとうございます。

私の馬術史

合資会社 上條鉛筆製造所

代表社員 上條 義雄

馬との出会い

一九二五年生まれの私は父のお陰で比較的に恵まれた家庭に育ちました。我が家では兄の二人は既に現在の九段高校の時代にクラブ活動で馬術を専攻し、卒業して社会人になってからも、長男は代々木の井上乘馬クラブで乗っていて、父の奨めもあって姉と一緒に通い始めました。

クラブは早稲田大学の練習場で、当時の最高学年生で今も千葉県馬術協会で審判をされている堀先生がおられて、丁寧ていねいにしっかりと練習を見て頂きました。練習馬に乗った後も先生の馬にも乗せて頂いて、主に馬場馬術を指導して頂いた事が、現在の私の馬

術の基礎になっており、またそれが私の馬との出会いであり、良き指導者との出会いであったと思っています。早稲田大学の指導者は、当時の井上乘馬クラブでは総ての事が大先輩の松岡監督と堀先生の思いのままに出来る立場にあったので、毎日の練習で約三ヶ月で総て馬の歩様の運動が出来る様になりました。堀先生からの指示で、クラブで自分で馬を持っておられる方（自馬）の馬を日曜日には三、四頭は乗っておりました。良い馬と良い指導者と良い友達との出会いが、僕の人生のほとんどの部分を今でも占めております。

家族の理解もあって、中学生の僕は授業が終わる

と直ぐに山ノ手線の巢鴨駅から小田急の代々木八幡まで、晴雨にかかわらず毎日の様に通っておりまして。我が家からは学校まで走って二分位の距離におりましたのに、遠いところまで毎日良くも通ったものだと、今思えば感心している次第です。この馬場には日本一の調教師の方々が来ておられ、子供の僕に何かとアドバイスをして頂いた事と、調教中の馬にも乗せて指導して頂き、大変な勉強をさせて頂きました。

進学は早稲田大学と皆さんが思っておられた様でしたが、当時僕の従兄弟が立教大学馬術部のキャプテンをしており、是非とも来いとのこと立教大学に進学しました。今考えると、とても充実した馬との出会いだったと思っています。

学生時代

戦争の真っ只中に立教大学に入学、体育会の本部が立教大学馬術部で、何故か部長は代々がチャプレンであったことは不思議な感じがしました。入学

早々に習志野での新入学生全員の軍事訓練があり、当時は各大学に陸軍から配属将校が来ていて、立教大学には当時の陸軍大佐の飯島信行氏が来ておられました（戦犯で亡くなられました）。僕は立教大学馬術部に所属しているので演習には参加せず、習志野騎兵学校に毎日教官の乗る馬を取りに行って、教官の代わりに習志野練兵場で皆の演習が終わるまで乗って、騎兵学校に帰しに行く毎日でした。何故ならば配属将校は馬術は苦手だったので。帰ってくる時「ご苦労」と^{ねぎり}労いの言葉を頂く程でした。

当時学校で馬を持っている大学は慶應大学位で、ほかの大学は一週間に水曜日、土曜日の午後と日曜日は一日中、陸軍士官学校か馬のいる軍隊での練習でした。僕はその他、馬事普及会という乗馬クラブで毎日乗っていました。普及会のオーナーは習志野の騎兵学校出身のバリバリの教官（本橋忠作氏）で、日本馬術界で始めて後退駈歩を調教された名人です。主として馬場馬術の馬の調教をなさっていた人で、僕達の仲間の逸話として残っている話を一つご紹介

します。新馬の調教中に反抗の強い馬がいて、教官は今日の自分の予定の調教課目が仕上がらない時は朝食は馬の上で食べていました。反抗が強く、拍車は曲がってしまいました。それ以後、この馬は全面的に調教に対して従順になり、グランプリを踏む名馬になりました。

終戦後、立教大学馬術部の馬場が学校の前にあった郵便局の焼けた後に出来たときに、監督の赤石氏が本橋先生をお呼びして、初期の練習場は総て先生の手で調教された馬でした。学生は恵まれた馬で練習が出来た事を感謝しております。馬場を持たなかった当時の練習場は、駒場にあった陸軍東部十七部隊（軍隊の物資を運ぶ部隊）と総武台（相模原）の陸軍士官学校で、水曜日と土曜日は午前八時から十二時まで駒場で馬場運動と障害練習、夏休みと冬休みは一週間（神奈川県原町田）の旅館に泊まっていたので、起床は天候に関係無く午前四時、就寝は午後十時で、練習場は士官学校、練習は午前中は八時から十二時まで馬場で障害と馬場馬術の練習、午後

練習は野外での不整地の騎乗と固定障害飛越練習で三時間、冬期合宿は十二月二十五日から一月五日迄で、休みは十二月三十一日午後六時から元旦の午後五時迄でした。今、その当時の仲間と会うと、楽しい話は合宿のつらかった話ばかりで、何故だろうと笑いあっています。今考えると、雪の日以外の休みは無かったと思っています。

昭和十九年になると、先輩達は続々と軍隊に取られ、残った僕達に形見の長靴、服、鞭を置いて出陣して帰らぬ人となった方々もおられます。終戦と共に続々と復員。勿論私も九州は久留米の陸軍師団通信部隊から復員。陸軍少尉は立教大学学部二年生に戻りました。同期の各大学生が集まって現在の関東学生馬術連盟を結成したり、今の東京都の宝くじも、関東学生馬術連盟が当時の宮内庁主馬寮の馬車で都内をわざとポロポロの服を着た松井翠生氏と共に宣伝して歩いた記憶があります。

二十一年春に立教大学馬術部として始めて自馬を一頭持ったのですが、場所が青梅の小平と僻地の為

に苦勞し、飼料も乏しく飼育が困難で、農家にあげ
る事になりました。当時の話になりますが、当番の
下級生は朝一升釜に一合の米をいれて電気コンロに
かけて帰ると丁度御飯が炊けていると言っていまし
た。今の電気釜の草分けと今でも笑い話になってい
ます。

昭和二十一年、第一回国民体育大会が京都で開催。
関東学生選手十二名が馬術障害の選手として西京極
競馬場で東西対抗戦の中障害飛越競技に出場しまし
たが、東日本が惜敗しました。当時の仲間に、オリ
ンピック、ヘルシンキ大会出場の喜多井君（亡くなっ
た）や荒木雄豪君、関西馬術連盟の西村喬君などが
いて、日本馬術界の中心として今でも活躍中です。
当時から法政・明治・立教、京大・同志社・立命館
がそれぞれ仲良しで、春、秋と交互に遠征試合をし
ておりました。未だに仲良しの学校らしいです。

学生生活も終わり、いよいよ社会人になる日が近
づき、何故か卒業は二十二年九月でした。当日はキ
ティ台風で栗橋付近で堤防が決壊、我が家は胸まで

の洪水で、卒業式の前日に父と知り合いの神田神保
町の昇竜館という旅館に避難して、旅館からの卒業
式でした。父が、「お前は予科三年になったばかり
で兵隊に行つて、帰ってきたら学部で二年で翌年の
九月に卒業して、一体何年大学で勉強したのだ」と。
でも僕は思います。「月謝では親父さんに孝行した
のでは」と。立教大学は良い学校でした。良い先生、
良い環境、良い友達を沢山貰つて卒業しました。本
当に有難うございました。

立教大学体育会馬術部コーチ時代

この時代の記録が麗澤大学馬術部を指導する為の
基礎になるかどうかは判りませんが、僕の預かった
母校の体育会立教大学馬術部のコーチの時代の部員
の指導方針は、監督で僕の最も尊敬する先輩の赤石
淳氏（故人にられました）の方針に添って部員を
指導した記録である事をお断りしておきます。赤石
監督と立教大学馬術部の方針は、「思いやりのある
人間、走りながら考える人間を作れ」との事で、

「コーチの責任は全部俺が取るから安心して何でもやれ。但し、今は関東で三部にいますので、三年以内に一部になる様にしてくれ」との事で引き受けた事を思い出します。

当時の部員は男子だけで二十人、最上級生は五人でした。馬は六頭で、馬場は障害馬場60m×80mと、正規の60m×20mの二面で、境の蹄跡(馬の歩く道)は開けてありました。僕のコーチする学生は最上級生の五人で、下級生はコーチした覚えがありません。全員をコーチする為と練習量を増やす為に、学年別の合宿を年に四回、一週間ずつ行いました。男子の一、二、三、四年と、女子合宿と、レギュラー選手合宿の六回で、一ヶ月半は、昼は仕事をしてから夕方六時に池袋駅に部員が車で迎えに来て、午前の練習の講評をして入浴就寝して、翌日午前四時から練習開始、六時に終わり駅まで送らせるという毎日でした。一年を通じて我が家で泊まる日は幾日だったか、家族が驚いていた事を今になって感謝しています。倅に当時、「パパ、今度は何日お家で泊まるの?」

なんていわれた事も今は思い出です。

夏の合宿は、山梨県の清里の馬場で秋の総合馬術の試合に備えて、標高一四〇〇メートルの高地での一ヶ月半を馬房の中にある宿舎で行いました。ここは日本馬術連盟が次期オリンピックに備えて総合選手の手練習の為に立教大学馬術部がアルバイトをして造った走路がある所です。

清里の主のポール・ラッシュ博士は立教の教授で、私の卒業式が彼の最後の大学への出席でした。彼は関東大震災の時にアメリカの聖公会から派遣された牧師で、日本の最も僻地の清里で医療と信仰と農業を指導する為に日本に留まった方で、アメリカンフットボールの日本の創始者としても有名な方です。生まれはケンタッキーで馬の名産地。条件が馬術とピタリと合う教授で、「牧場に馬がないのは絵にならない」と当時の理事の名取君(僕の尊敬する後輩で故人になられた人)に言い付けて、長野の馬市で雄と雌の馬を買ってきて牧場に放していたが、手入れをする人がいないので、立教大学馬術部がメキシ

コオリンピックの始まる前年に協力の依頼を受けて、その年から秋の関東総合馬術の試合の前に馬の呼吸の調整の為に、夏は清里で合宿する事になりました。馬輸送の後の一週間は、馬も呼吸の調整の為に女子の合宿から始める事にして、本格的な男子の学年別の練習は、二週間後から始め、私も土、日は泊まりで合宿に参加しました。当時の話で、ポール・ラツシュ氏から「毎朝六時に起きて練習を見に出掛けたが、グラウンドに誰もおらず、立教馬術部は何時から練習をしているのか」とマネージャーに問い合わせが来たが、「練習は午前四時から。六時には終わっている」と知らせたら驚いていたとの事で、涼しい清里に来て練習時間に変更の無い体育会の練習に感心していた様子でした。

同じころに日本近代五種選手の合宿も始まり、私も役員だったので、特に馬術のコーチをして頂きたいとの監督からの要請で、自衛隊、警視庁、皇宮警察から選ばれた隊員の障害練習のコーチとして、土、日の午前中に面倒を見ました。隊員は精鋭五名程の

第一期生で、馬術以外の射撃、フェンシング、水泳、マラソンの練習も清里でやっていました。世界各国の近代五種の選手は、馬術のできる者から選んでいくのに、日本ではマラソンから選んでいくと聞いて「勝てる訳が無い」と思いました。

夏の大学の合宿の目的は、一年生は選手になれる技量の別れ目で、障害の高さは九〇cmを飛越する事を基準として練習していました。レギュラーの選手には一m二〇cmが飛越基準の練習でした。一九五九年〜一九七二年までコーチをさせて頂いていた間に部員は五十人になり、一部優勝は早稲田に一秒（〇・二五秒）の差で阻まれて二位になったが、一部への昇格は三年間で果たしました。

コーチを辞める決意をしたのは、「これ以上の練習をさせては選手が可哀想かな？」と思う気持ちが出てきた時だったと思います。そして立教大学馬術部のコーチから身を引いた次第です。

馬術とは、馬と人、馬を通じての出会い

馬術はとても難しいものですが、他人に説明をする時には「忍術と同じこと」で、何で馬が止まったのだろうか？何で早く走ったのか？何で右や左に向きを変えたのか？何で後に歩いたのだろうか？が他人に全く判らない様にする「ことだ」と教えています。馬と人間とのかわり合いは「信頼」と「尊敬」と「愛情」だと思っています。今、麗澤大学馬術部で飼育されているシンボルドルフの子供は血統的に大変気性の激しい馬ですが、現在はとてもおとなしい馬になっています。それは部員の皆さんの馬に接する気持ちがあるままに馬に伝わっている証拠だと思います。馬を通じての出会いには、競技会での審判の補助で麗澤大学馬術部の皆さんの評判がとても良く千葉県馬術連盟の方々からお褒めの言葉を顧問の中野先生もお聞きのことと存じます。人生はどれだけ多くの人と出会ったかで決まると私は思っています。今の人に少ない他人との出会いを、部員の皆さんが大切にすることを勧めたいと思っています。

麗澤大学馬術部と私

一九九五年の正月に、私の立教大学馬術部の後輩の中原君からお話があるとのことでお目にかかった時に、「今私は麗澤大学馬術部に行って部員の指導をしています、今いる馬の能力が判らないので乗りに来て頂けないか」と言われ、彼と一緒に麗澤大学に伺って、会館で中野氏と始めてお会いしたのが麗澤大学馬術部との接点だったと思います。

僕は麗澤大学について何の知識も無かったので「広池さん」との言葉で広池学園を思い出した次第です。私の知り合いで岩崎英雄さんとおっしゃる方がおられます。その岩崎さんと昭和三十二年頃の正月に雑司ヶ谷墓地のお茶屋さんで偶然にお目に掛り、今日は広池先生のお墓まいりに来られたとの事で、我が家の墓地と広池さんのお墓は通り一つ隔たった所で、正月には何台もの観光バスが来てお茶屋さんに代表の方が記帳している姿を何時も拝見していた次第です。岩崎君の話で、彼は前から最高道徳の会に入っておられた事は知っていましたが、それが

モラロジの研究の麗澤さんとは今日まで知りませんでした。世の中のご縁というものは不思議なものだと感じました。

初めて伺った麗澤大学馬術部は、本部の隣にあって馬房の入口や馬場、既にまで野うさぎが遊びに来ている平和な静かな場所でした。体育会系の部員の指導をしてきた私には夢のような環境でした。始めから私は麗澤大学馬術部員の指導をする積もりは無く、中原君から頼まれたのは、育成している馬の能力を引き出す事と指導者の養成で、一週間に一日のお約束でした。

中原君の思わぬ怪我で、目下のところは彼の体の回復する迄の間は部員の指導もする事になり、現在に至っている次第です。体育会系の運動部と違って、学業第一の学生との接触は僕にも良い経験をさせて頂いている事を感謝しています。ただ、静かでおとなしいことは思いやりとは少し違って、事も気付きました。少し厳しい言葉と思いますが、部員の皆さんは私のいまままで指導してきた学生と比べると、

少し覇気が無い様に感じられます。学校当局は素晴らしい設備をして下さっているのに、学生はそれ十分に利用しているとは必ずしも言えず、もったいないと思っています。優秀な職員の指導者の方にもっと質問して知識を奪い取る気持ちがあほしいと思います。

しかし、秋の千葉県の試合の前に、僕の所に「練習は朝六時から始めたい」との連絡が学生から入りました。私からの学生達の指導は終わった様です。

私の指導方針

見せてみて 言って聞かせて させてみて
褒めてやらねば 誰も来ぬぞよ

(山本五十六の言葉より)

人生のキー・ワード「やる気」

麗澤高等学校教諭
麗澤大学空手道部監督

野 中 道 男

私の経歴

土佐の高校に生まれる。麗澤瑞浪高等学校、麗澤大学イギリス語学科（現在の英語科）を昭和四十七年に卒業。卒業後、恩師が創立した明德中学校（現、明德義塾中等高等学校）で、四年間英語の教鞭をとる。昭和五十一年、念願であったアメリカに留学する。目的は教育学の勉強であったが、十分な資金もなく、空手の指導をして、生活費を稼ぐ。ニューヨークに一年半滞在、コロンビア大学等で空手の指導。一九七七年十一月、全米空手道選手権大会で個人組手、個人形で優勝、総合優勝者に贈られる全米グラウンドチャンピオンを獲得。一九七七年十二月、ボストンに移り、自分の道場を開く（現在は麗澤大学空手道部の後輩が後を継いで指導している）。同時に、サフォーク大学大学院に入学、教育学の勉強を始める。一九七九年九月大学院を卒業し、教育学修士号を取得する。帰国の意志なく、就職活動をする。ボストン周辺の大学に履歴書を送付し、日本語教師または体育としての空手指導の口を探す。しかし、フルタイムのポストはなく、クインジー・ジュニア・カレッジで非常勤講師として空手の指導。私の師範よりアメリカに残って空手の指導をするように慰留されたが、時を同じく、ボストンの大学の寮視察でボストンに来られていた、麗澤大学の日教授に廣池学園に

戻ってくるよう誘われる。心残りはあったが、アメリカに別れを告げ一九八〇年十一月帰国。一九八一年四月麗澤瑞浪高等学校で第二期教員活動に入る。翌一九八二年四月麗澤高等学校に転勤、現在に至る。

私の歩んできた道

親の意向で、建築家志望の夢破れ、麗澤大学イギリス語学科に入学。空手中心の四年間であった。「五輪書」、「不動智神妙録」、禅の本を読み、空手道の修行を通して、自己改革を意識する。人に負けないものを身に付けて、揺るぎない自信を持つことを目指した。ネガティブな意識（怒り、憎しみ、悲しみ、など）を自己の内から取り除く訓練をした。武士のような修行の真似事をした時代であった。もっとも、まだ開眼にはほど遠く、修行継続中である。就職のことなどあまり考えていなかった。女王蜂のために汗水たらして蜜蜂のように働くサラリーマンに全く興味がなく、大学四年の時にも、一切の就職活動はせず、あまり働く意志がなかった。好き

な歴史を勉強しようとか、アメリカに行きたいなあなどと、のんびり構えていた。

（第一期教員時代） 恩師が学校を創立するということで、恩返しのためで奉職。大学時代は「教師」になるなどとは思ってもしなかった。恩師の教えを受けながら、夢を子供に与える仕事であることが分かってきて、楽しさも感じてきた。しかし、自分の教育観、教育手法が今のままでいいのかという疑問も同時に持ち始めた。突然、転機がやってきた。私の空手の師範が、アメリカに空手の指導に行かないか、と言うのである。十分な資金も無いまま渡米。自分を更に高められるチャンス到来。

（アメリカ時代―ニューヨーク、ボストンでの四年半）
アメリカでの四年半は自己形成という点で私にとって最も重要な時期であったように思われる。厳しい競争社会の中でいろいろな体験を通して、「どこでも生きられる」という自信―生きる力を与えて

くれた。

金銭的に苦しかった。自分の予想では約一年半くらいで学費、生活費は底をつくであろうと予測していた。最初は大学の寮に住んでいたが、節約の為、屋根裏部屋みたいな三畳くらいの部屋を月五〇ドルで間借り。食費も切りつめざるをえなかった。空手の指導だけでは十分な収入を得られず、日本人学校の講師、大工（NYソーホーのロフトの改築工事）、宝石商店員（NY・ダイアモンド・ストリート）などのアルバイトをした。教師といういわゆる「堅い仕事」からかけ離れており、違った職種の体験を通して自分の視野を広げられたと思う。

（生きぬく）日本にいる時は、自分を愛してくれる人が回りにたくさんいて、「何とかなるであろう」と、甘い人生観を形成していたように思う。しかし、生活に対するバックグラウンドのないアメリカでは、自分で自分の道を切り開いていかななくてはならなかった。ほぼゼロからのスタートである。アメリカ文化

へアジャストし、友人を作り、生活費をどう捻出するか、初めて体験する何とも言えぬ緊張感があった。「ずいぶん苦勞したね」と、私の回りの人は同情をよせてくれる。しかし、私は苦勞したとは全く思っていない。なぜなら、精神的、経済的にいろいろな試練に遭遇するであろうことは、私のブループリントには描かれていたからである。「ああ、やはりこうなったか、予測通り」と、思うくらいであった。「苦勞」を苦痛に感じる人は、自己の能力判断に甘いか、あるいは自己の将来に対してユートピア的幻想を抱き続けている人であろう。「苦勞」は、予期していない時に身に降りかかると感じるのであって、苦勞するであろうという予測が前もって出来ていれば、「苦勞」とは思わず、問題に対し、平常心でもって冷静に対処できるであろう。

また、私は「苦勞」を自己変革を手助けしてくれる「試練」と考えている。我々凡人が人生において直面する問題は、多くの場合、自己中心的な思考に起因する「負」の要因から発生しているか、または

人の「器」をさらに大きくしてくれる神から与えられる恩寵的試練と思われる。そして、その人生の過程において起こる様々な問題にどう対処するかによって、二種類の人生に分かれていくと思う。一つは、自己を否定し、さらに他者批判をして自己責任から逃れようとする、暗い人生。もうひとつは、直面する問題を自己の精神作用に対する警告と受け止め、前向きに自己の道を切り開こうとする明るい人生。

さて、あなたはどちらを選びますか。人生は「The Process of Solving Problems (問題解決の過程)」なのです。問題から逃避する人、問題を他人に責任転嫁する人は、いつまでたっても自己中心的な思考から出られないでしょう。つまり、自己の開放ができず、苦しみ続けることになるでしょう。人はあなたにアドバイスをしてくれます。しかし、そのアドバイスを取り入れ、実行するのはあなたなのです。つまり、自分を鍛えてくれるのは自分でしかないのです。受け身となっではいけません。自分自身が未知の人生を照らす「松明」となって輝かなくてはな

りません。

—「人生に苦楽あり、故に樂し」—

(人生のフロンティア精神)では、いかにして自分の道を切り開いていくのか。そのキーワードは「やる気」です。「やる気を出しなさい」と言われてもやる気は出るものではない。学生諸君は何度となくこのフレーズを、親や先生から言われていると思う。自身も「やる気を出さねば…」と思っても、どうもやる気が出てこない。挙げ句の果てに、「俺はやればできるのだ。ただやらないだけだ」と納得し、変な自信を持ってしまふ。「じゃあ、やれば」と言われても、変に自己暗示をかけ、マインドコントロールした自分は動くはずもない。「やる気が出る」というのは本人の内面的な働きだから、何か本人が納得することがなければ、やる気は出てこないであろう。では、やる気を引き出すものは何だろう。

孟子の言葉に次のようなものがある。「夫志氣帥也」—それ志は氣の帥(すい)なり。「志がやる気

の源である」という意味であろう。「志」とは人生における夢とか価値観というものだろう。

私のことを申して恐縮であるが、もう二十年も前のことである。「私の経歴」で述べたように、アメリカ留学中、全米空手道選手権グラッド・チャンピオンとなった。全米各地の予選を勝ち抜いてきた選手と戦ったわけだから、優勝まで五、六人と試合をしたのであろう。一試合の試合時間は二分だから、合計するとたったの一〇〜一二分。それまで十年の間、世界チャンピオンだった大石師範に「地獄」のような稽古をつけられてきた。小生に何故出来たのだろう。何故耐えられたのだろう。自分でも不思議である。でも「やるからには一度頂点に立ちたい」と思っていたのである。そんな小生の夢、価値観が、あの稽古の苦しさを克服させたのだろうと今となっては懐する。

学生諸君にとって身近な話をしよう。受験前の生徒は実によく勉強する。「あの大学に入りたい」、「外交官になりたい」、「弁護士になりたい」と、そ

んな具体的な夢を持っている学生は勉強することをあまり苦にせず、本気で取り組むものである。諸君達も麗澤大学に入学する前はよく頑張ったであろう。思い起こしてみよう。そう、具体的な志、夢、価値観を持つことが「やる気を起こす」キー・ワードである。

では、「志」、「夢」を持つにはどうしたらいいのだろうか。まず、次のことを自覚する必要があるだろう。それは、諸君達はこの世の中でかけがえのない存在であるということである。不必要な人間などこの世にはいない。そして、かけがえのない存在である各々には、かけがえのないこの世で果たすべき使命があるはずだ。

私の郷里の先輩に、かの坂本竜馬がいる。激動の日本の中で、己の使命を己の「志」、「夢」とし、日本の舵取りに奔走したのである。「人事を尽くして天命を待つ」人ではなく、彼こそ「天命を悟って人事を尽くした」人だと確信している。

さあ、夢を、自分の使命を探し始めよう。将来の

夢を友人と、師と、親と語り合おう。二十一世紀はどんな世の中になっていて、その中で自分がどんな役割（使命）を担っているのか、真剣に思いをはせよう。ワクワクするような将来の自画像を心に描こうではないか。「思い」、「想念」というエネルギーが「やる気」を起こしてくれるのである。「想念」が「現実」を作り出すのです。「勉強する」ことを目標にしないで、そうではなく、勉強は夢を実現する手段であると認識すべきである。

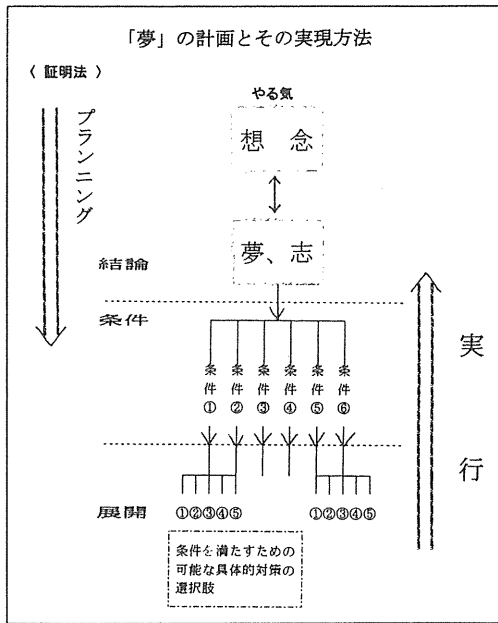
最後にもう一つ。夢の実現の手段である勉強のゴールが一〇〇メートル先にあるとするならば、諸君は今カール・ルイスのように九秒八で走れなくてもいいのである。目的は九秒八で走るのではなく、一〇〇メートルを完走することであるからだ。コツコツやれば、徐々に速くなるものだ。

どうですか、少しエネルギーが湧いてきたかな？ かけがえのない存在の諸君達にはきっと出来るはずだ。さあ、大きな夢を持って、希望に満ちた明るい学生生活を送ろう、輝く人生に一步踏み出そう。

次のチャートは私が採用した「夢実現の手法」です。参考になればと思います。

*Good luck in your life,
And never cease to be lighted.
God bless you.*

Michio NONAKA



茶道部と黒川ちる子先生

平成十年度卒業生

外国語学部 中国語学科 梅本 茜

現在、我々麗澤大学茶道部には表千家と裏千家の二つの流派があり、それぞれ水曜日と木曜日に師を招いて、稽古に励んでいます。一緒にお稽古するチャンスがないため、お互いの違いを見いだすことはありませんが、共通して言えることは、茶道を通し、何かを感じとり、学び成長していくことだと思えます。少なくとも指導者から、仲間からあれこれ指摘されることによって、あるいは切磋琢磨することによって、自分というものをより深く見つめるよいきっかけをつかむことはできると思います。

その手助けを下さっているのが、私達茶道部裏千家の師、黒川ちる子先生です。裏千家ができた

のは、ここ数年であります。はじめは、部員数も三、四人で、道具も裏千家のものは一つもありませんでした。それに、留学によって中堅の部員が半年ないし一年間抜けてしまうことや、時間割りの都合などで、一人しか学生が茶室にいない時もありました。それを考えると、先生は今までよく見放さずにご指導に来てくださったものだと深く感謝せずにはいられません。

今では、卒業後、先生のご自宅でお稽古を続けていらっしゃる先輩がたくさんいて、時々私達のお稽古を見に来てくれたり、お茶会に参加してくれたりにしています。このようにして、これからもたてのつ

なかりを大切に守っていきたいと思います。

近年、部員数は増加傾向にあり、今年度は裏千家だけで、三十数名にもなりました。その中には、日本人学生だけでなく、台湾やマレーシアからの留学生もいます。先生はゆっくりとていねいに一つ一つ教えていきます。男子部員も増え、道具もやっと揃いはじめ、裏千家として独立し、これからますます活発に活動していこうとしています。インターネットや携帯電話など様々な情報が飛びかう中、心の豊かさを考える場を求める学生が増えてきたということなのでしょう。実際、授業の合間をぬって部屋に来て、稽古に打ち込んでいる時、何かは分からないけれど、心地よさを感じている学生は多いようです。私が茶道を学んで四年になります。つまり、黒川先生と出会ってから四年の月日が流れたことになりました。私をはじめて先生とお会したのは、一年生の五月でした。オーストラリア留学中に自分があまりにも日本の文化について無知であることにショックをうけ、何か一つ日本文化を自分の中に身をつけ

たいと思ひ茶室に見学に行ったのがはじまりです。

茶室の奥に座り、指導していた先生は私の目にはものすごくステキな人にうつりました。お辞儀の仕方や言葉使い、身のこなしなどとても魅力的でした。その魅力に吸いよせられるように入部し、私のお稽古がはじまりました。まず、お辞儀の仕方からやりました。真・行・草とお辞儀にも三種類あることを知り、少しでもきれいになるように、何度もくり返し練習したのを覚えています。帛紗^{ふくさ}捌^はきや茶杓^{ちやせき}の清め方などを順番に教えていただき、やっとお点前ができるようになった時は感動しました。自分の知らなかったことがどんどん身についてきて、時には失敗したり、叱られたりしながら毎週水曜日に、先生や先輩に色々なことを教えてもらえるのがうれしくて仕方がなかったことをなつかしく思い出します。自分から学ぶことの貴重さ、楽しさを私に教えてくれました。

一通りのお点前ができるようになったころ、私は台湾へ留学しました。そこで、先生からいただいた

紙の中の一文にこう書かれていました。「帰って来たら、単にお点前が出来るだけではダメですね……」。私は「私はずいぶんと悩みました。そして、以前は、点前作法のルールにばかり気をとられていた自分から、点前作法の規律の正しさや手のうごき、挨拶や人とのコミュニケーションのとり方など、より細かな所に目を向けて学ぼうと心がけるようになりました。日本にいないくても、離れていても先生は私のことをちゃんと見ていてくれました。茶道部という、何時間も痛い正座をがまんして、難しい作法や礼儀をこわい先生がしかめっ面して教えていて、日常生活とはほど遠いと思っっている人が多いようですが、そうではないのです。作法は大事です。しかし、それ以上の大切なこともあるのです。学ぶことはたくさんあるのです。そのことに気づかせてくれた出来事を紹介します。

ある日のお稽古の日、床の間には「日々是好日」と書かれた掛軸がかけられていました。先生に、「梅ちゃん、この言葉の意味を自分なりに考えてこ

れからお稽古しなさい」と言われました。私は、その時は、「毎日が良い日である」と解釈したのですが、最近になってもう一つの解釈をしました。今日ただ今の、この一日の貴さに生かされているよろこびを感じ、精一杯大切に生きていくことを示しているのではないだろうか。私達は心がけ次第で、その日をよくもし、無駄にもするわけです。その日、その人の心意気次第で、その日その日が「好日」になるのです。毎日毎日が茶の修行であり、人生の生きざまであって、物事に対していつも真剣に取り組む、そこに茶があり、人間の真に生きる道があるということ。先生は私に言いたかったのではないでしょうか。私はこのように受けとめて、実行しようと心掛けています。

茶道を学ぶ喜びと共に、一椀のお茶を通して出会う、「二期一会」の素晴らしさも学びました。私は台湾留学中に、中国式茶道部に入って活動してきました。日本茶道を大勢の前で紹介する機会にも恵まれ、浴衣を来てお点前をしました。茶道はもともと

中国から日本にもたらされたものと言われている、お茶の精神においては共通するものが数多くありました。同じような文化を共有していることを知って、茶道の今後のさらなる国際的な発展の可能性を肌で感じる事ができました。

師はボランティア活動にも大変熱心でいらっしやいます。茶道の心得のある人もない人もみんな一緒にお茶を楽しんでいたかどうかという考えではじめられ、老人ホームや障害者の作業所へ出向いて、無償でお茶をたててさしあげています。私は、今まで何度か、一緒にさせていただいて老人ホームへ行きました。普段は看護婦の白衣しか見ていないからと言って、着物を喜んでくれる人もいれば、若いころに習ったお茶を懐かしみながら飲む人もいます。私は行く度に、茶道を通じて、出会える多くの人々の笑顔のおかげで、本当に心から良かったと思います。おじいさんやおばあさんたちのうれしそうな笑顔は、私に、全ての人に共通な幸せな気持ちの表現は笑顔であることを教えてくれました。その笑顔が絶えな

いように日々の生活をしたいものです。

毎週水曜日は、裏千家の活動の日です。一目目が空いている人達が集まり、畳を掃いて拭き掃除からはじまります。私はこれを四年間続けました。道具を置く位置、茶の量、季節に合った茶碗や茶花など、学ぶことはたくさんあります。そして、つくりたての季節のお茶菓子を持って来てくださる先生をお迎へに行きます。いつでも、どこでも欲しいものが入るようになって、季節感が失われつつある中、私達は、物事や季節に敏感に反応するようにしているのです。ただ、お菓子をいただき、お茶を飲むだけではなく、礼儀や精神を学んでいるのです。

就職活動の場においても、面接官に「なぜそのよくなきれいなお辞儀ができるのか」と問われた人達の話をよく聞きます。四年間の稽古のおかげで規則正しい、節度ある人と人との対応の仕方、身体全体の動作などが理屈ぬきで体に身につけているのだと思います。型ばかりにとらわれがちな近代社会において、中身（心）の伴った礼儀の必要性が高まって

いるように思います。茶道は、点前作法を学びながら、知らない間に人が守らなければならない道徳、儒教で言う五つの徳の仁・義・礼・智・信にかなっており、それをいかにして実行していくかを導き、習慣となって毎日の行いにもうっかり見過ごしたり、失敗することがなくなり、しっかりした心構えをつくることによって、人間が生活していくための大切な原動力となるのだということを教えていただきました。

した。

大学時代に学ぶべきことは、人生とは、生きることとはどんなことか、良き友人を見つけること、恋人を見つけること、生きることすべてが勉強です。そして、自分が理想とするような指導者に会えたら、大学生活は大成功です。私は、黒川先生と出会い、茶道を学べたことで大満足の大学生活でした。

死別体験者を授業に招いて

—— 道徳科学授業報告 ——

外国語学部教授 水野 治太郎

『読売新聞』九八・七・十七（千葉版）

「主婦が語る悲しみ体験」

—— 麗澤大で「生と死」考える授業 ——

「悲しみの共感」が希薄になる現代、生と死の重みを考えて欲しいと、柏市光ヶ丘にある麗沢大学が外国語学部の水野治太郎教授（60）（社会倫理思想史）の授業で十六日、わが子を失った主婦二人が悲しみの体験を発表した。水野教授は、一九九三年六月に発足した「東葛地区・生と死を考える会」（会員約二百人）の代表を務める一方、研究室で一般市民を対象に、昨

年から「痛みの分かち合いの会」も開いている。

今回は、担当している一般教養の「道徳科学」の授業のひとつとして、同会のメンバーの体験報告を取り入れた。

八年前、高校三年生の長男を友人の暴力で亡くした東京都杉並区の主婦は「悔しくて、泣いてばかりいた。夜が怖く、すべてがむなしかった」と当時の悲しみを話した。

また、四年前、脳しゅようで高校三年生の長男を失い、その闘病日記がテレビドラマの原作ともなった柏市内の主婦は「残された命を精いっぱい生きた息子にとって、あすという日は、重い意味があった」と、当

時のメモを披露しながら、切々と打ち明けた。

聴講した約百五十人の学生の中には、涙ぐむ姿も見られた。

肉親を失った家族を授業に参加させるという初の試みについて、水野教授は「これまでの教育は、右上がりの教育で、挫折や失敗といった弱さを否定してきた。これからは、弱さや悲しみを人とかかわりの原点として考える。『パトスの知』が必要だ」と述べ、病院での死が一般化して、家庭から死が消えた中での「デス・エデュケーション（死の教育）」の重要性を強調した。

▲授業感想発表▼

一、心の教育の大切さを思う

英語学科 一年 平山恵理子

私は、この授業を受けることができてよかったと思っています。この授業は、他の授業のようにくを学んだ、覚えた、ということとは具体的に言えないけれど、私自身の内面、考え方といった、私の心に大いに影響を与

えていると思います。この授業を通じて、普段は別に深く考えたりしたことなかった「悪」や、「生」について考えてみるようになりました。この二つのテーマのうちでも、特に「生」―「生きる」ことについての授業は私の内面に影響を与えていると思います。

今まで、自分が生きていることが、あまりにあたり前すぎて、また私は幸いにも人の死というものに立ち会ったこともなく、周りに死というものの存在すら感じない毎日を送っているので、生きているということには普通すぎて深く考えたことなどありませんでした。毎朝目が覚めて、学校に行ったりして一日生活して、そして夜には寝る、そんなことはあたり前のことだと思っていました。しかし、この世の中には、こういうことがあたり前ではない人たちもいるのだと思います。私は恵まれているのだ、と感心しました。（この「恵まれている」という言葉は適切ではないかもしれませんが…）そういうことで、西田英史君の話は私にはとても衝撃的でした。

この授業で最も印象に残っていることは、一番最後

の授業で行った「心の痛みの体験発表」です。私は話を聞きながら、話をしてくださいとお母さんたちの強さを感じました。特に、橋本さんには驚きさえおぼえました。なぜなら、橋本さんはとても生き生きとしていらして、本当はすぐくつらいと思うのに、なんというかとてもきやすい雰囲気でお話ししてくれました。私はその姿を見て、すごいなあ、強いんだなあと感じました。と同時に、とても素敵だなあと思いました。なぜなら、本当に、生き生きと輝いて見えたからです。西田さんもすぐくつらりと話をしてくれました。

英史くんのことは、その前の授業で見たビデオですごく強い人だということは感じていました。しかし、実際にお話をきいてみると、ビデオよりもよりその強さを感じました。私は、この話をきいて、自分はずかしくなりました。私は、英史くんのように、今をせいっぱい生きていないのだと改めて気づかされました。また、英史くんのような考え方はどうやっても私からあんなにすごい考え方、生き方ができるのか本当に不

思議です。でもそれはたぶん、「命の重さ」「今という時間の重さ」の考え方の違いからきているのだと思います。英史くんの言葉に「人は生きている間しか生きることができない。それをどう生きるかはその人しだいだ」という言葉がありました。私はそれをきいて、肉体的に生きていることと、「生きる」というのは違うのだと改めて思いました。では「生きる」というのはなんだろうか。これは考えても答えがでてきません。すごい難しい問題だと思います。でも、こればかりは、きっとこの授業を受けるだけでは答えはでてこないだろうと思います。「生きる」ことの意味をみつげるために私たちは「生きて」いるのかな、とも思っています。いつ、「死」が訪れるかわからないから「今」をせいっぱい生きる、これが英史くんの生き方なのだと私は思いました。それに加えて、今までの感謝をするために残りの人生を生きる、とも言っていました。これは、本当にすごいと思います。私ならきっと自分のために生きようとするだろうし、もしかしたら感謝どころかまわりの人たちのせいに行ったり、まわりの人

にあたりたりしてしまおうと思います。でも、人間は一人では生きられないのだし、知らず知らずのうちに助けたり助けられたりしているはず。でも、そういうのは、あたり前すぎてしまって、感謝の気持ちを忘れがちです。英史くんのその考え方は、そんな基本的なことを気づかせてくれました。英史くんの話を聞いて、私も一日一日をせいっぱい生きて、最後に、今までいい人生を送れたな、と思えるように生きたいと思いました。

また、話をきいていて、二人のお母さんがともに、「ありがとう」と亡くなられたお子さんに言っていました。私はこの「ありがとう」がずっと心に残っていて、なんかすごくいいなあと思いました。なんでそう感じたのかはよくわからないのですが、心に感じるものがありました。このたった一言が、二人の息子さんの命、今までの人生が意味あるものだというのを表している気がしました。つまり、死んでしまったら何も残らないのではなくて、死んでしまった人は確かに大切な存在なんだよ、忘れちゃいけないんだよ、といっ

ているような気がしました。誰かに「ありがとう」と言ってもらえるような生き方が、その人にとってすごく大事なのだと思います。だから、「ありがとう」という言葉ってすごくいい言葉だな、と思いました。

本当はもっといろいろと考えたこともあるのですが、うまく言葉でいい表すことができません。この授業は、頭で学ぶというよりも、心に刻まれていく、という感じです。

今の世の中には、こういう授業は本当に必要だと思います。強制的に覚えさせられるのではなく、自分の思い、感じたことがそのままずっと自然に心に入り残ってゆくこの授業は、心の教育だと私は思います。私たちはもっといろいろなことを自分で考えて身につけなければいけないのだと思います。そしてそういうことは、学校の勉強よりもはるかに大切なことなのではないかと思っています。私はこの授業を受けることができます、本当によかったと心から思っています。

二、一日を精一杯生きる

日本語学科 一年 竹石 桂子

「主体の知、人間として生きることの意味の探求」
の授業を通じて考えたこと」

つい先程、「愛するわが子を亡くした親の悲嘆」という題の心の痛みの体験発表を聞いたばかりだ。今のこの気持ちをお忘れないうちにしっかりと書き留めたいと思い書いている。人間は忘れる動物であると私自身、考えているからだ。辛く、悲しいことでも自然と時と共に忘却する。強く心に刻み込まれていることも、時が経つうちに、その傷は少しずつ癒されて和らいでいくものだと思う。今までは、少なくとも、そう思っていた。今もそう思えないこともないが、自分の子供を亡くした母親の話を直接、聞いたことよって、傷の深さを感じさせられた。私の母親が、いつか私に話してくれたことがあったのだが、それは「親より先に亡くなることほど親不孝なものはない」ということだ。つまりは親にとって子というものは希望であり、期待

して育てていく宝のような存在なのだろう。また、母はこうも言った。「いざとなったら親は自分の身を捨てても、子供に尽すものだ」。私はまだ、出産経験もないし、子供を育てるという行為をしたことがない。だから、自分の子供を愛するという、愛の深さも募る想いも、本当の意味で理解するのは難しい。恐らく、自分がそういう立場にならなければ分からないことかもしれない。しかし、私は他人の母親がどれだけ亡くなった子供のことを愛していたか、愛しているか、肌に感じとることが多少なりともできた気がする。ただ、平凡に日常生活を送っていると、家族の愛には鈍感であることが多い。何かの、きっかけがあった時、初めて両親の温かさを感じたりもする。子供にとって親という存在が、一番大切な人でなくて二番目になる時が来ても、親は子供を第一に考えるものだと思った。それは人間の本能かもしれないと思った。人間の本能が、子供を守るといふものであるとするならば、その子供を全力で救おうとするであろう。自分の命に引き替えてでも、子供に命を捧げたいとも考えるだろう。

だが、もしも自分の力では、どうすることもできなく、子供が亡くなっていくことを知ったら…。親は自分の無力さを責め、そのことで親は子供にとっては底知れぬ苦痛を味わうのであろうと思った。

橋本さんと西田さんは、今回の発表で私達に「精一杯、生きなさい」という人生にとって大きなテーマを掲げてくれたと思う。勇気のある人達だと思った。いや、困難に立ち向かってきた母親達の姿を垣間見たのだと思う。立ち直って、私達に発表できる状態になるまで、どのくらいの時間がかかったのだろうか。その時間は強くならなければならなかった期間のことである。実際、思い出して発表するのは辛いことだったのではないかとも思う。話す声からは泣きたい気持ちを抱くところらえているのがうかがえた。それは、橋本さんが息子さんの亡くなった「平成二年二月四日」という日を少し間をおいて話されたからだった。まるで重苦しい記憶の扉を自分一人の力で、開けなければならぬ人の姿だった。私は即座に考えた。これから彼女が話すことを一言一言、大切に聞きもらさないように

しよう。そして鉛筆を取り、言葉を書き残しておこうとした。

橋本さんは、十七年と十一ヶ月間の命で、この世を去った息子の死について、まず事実を話された。友人二人の暴力によって、息子の命の危険を知らされたこと。病院で息子が痛ましい姿で横になっているのを見たこと。医者に脳ざしように一週間の命しかないと告知されたこと。もしも命を取り留めたとしても、植物人間になるだろうということ。∴事実を一つ一つ慎重に話されていた。それらの事実を改めて考えてみると、何と突然で何とショックなことであろうかと胸が痛くなる。やはり、ショックが大きすぎて橋本さんの話のように「信じられなくて、まるでドラマを観ているようだった」のだろう。恐らく、気が狂いそうになるくらいに泣いたのは、しばらくしてから、息子の死を自覚してからだだったのでないだろうか。私自身、人は本当に悲しい時は涙が出ないと考えているからだ。泣けば済むなら、泣けばいいけれど、ショックを受けている時は何が何だか分からなくて、ぼう然としてい

ると思う。橋本さんの夫である人は、きっと、そのショックをずっと引きずっていたのかもしれないと思う。いや、きっと泣きたい気持ちをぐっと抑えて戦っていたのだと思う。だから話の中でも、橋本さんがおっしゃったように夫である人は胃かいようであったとか、人相が周囲から見ても変わっていたのだろう。息子さんの弟も多分、悔しくて悔しくて辛かったに違いない。兄の代わりに、暴力を加えた一人を気が済むまで殴りたかったはずだ。

私にも兄がいる。私が小学生の頃、私より三つ上の兄は中学二年生だった。兄はおとなしく優しい性格だったため、たちの悪い同輩に数回にわたって嫌がらせを受けていたそう。だが、私は勿論のこと両親さえ、そんな兄の学校生活に気づくよしもなかった。しかし、ある日のことだった。家に中学校から突然、電話で連絡が入ったらしい。兄がコンクリートに頭を打ちつけられて病院に運ばれたという知らせだったらしい。当時、家には内職として洋裁の仕事をしていた母と祖父母がいた。父は単身赴任をしていて、なかなか家には

いなかったように思う。だから母は、祖父の運転する車で、パニックになりながらも病院へ向かった。私はまだ小学生だったので、その時は学校にいた。でも帰宅して、いつもの和やかな家族の雰囲気はなく、何かしら緊迫した空気が漂っているのを感じとった。母親は重苦しい顔をして、ボソッと私に告げた。「お兄ちゃんはいま寝てるから静かにね」。私はなぜ兄が昼間から寝ているのか不安になって尋ねてみた。母は兄が同輩の一人に一方的に殴られて、ケガを負わされたことに告げた。私の兄はいわゆる「いじめ」というのにあってきた。そのことは、兄が殴られて頭を何針か縫わなければならなくなるまで、ずっと続いていたらしい。兄はケンカを売られてのるタイプの人ではない。むしろ、責任感が強いからやられても耐え続けるタイプの人だった。学校で嫌がらせをされても、家に戻ってれば何時間も部屋に閉じ込められて、一人でファミコンをして気を紛らわしていたんだと思う。家族は兄のことを単なる怠け者としか見ていなかった。兄は心を閉ざしてしまっていたのだと思う。人を信じられず、コ

ンピューターにしか語りかけることができなかったの
だろう。だから重苦しい顔をしていたことも家族には、
あまり分からなかったのだ。テレビの画面だけには分
かっていただろう。兄は口数の少ない人だった。妹の
私には、優しかった。私の方かというと生意気でお転
婆な小学生だったが、そんな私に学校での事で八つ当

たりする人では決してなかった。何だかんだケンカす
ることはあっても、兄は優しくかった。そんな兄が頭に
真っ白な包帯を巻いてベットに横になっていた。寝て
いない様子の兄に近づき、私は何ともいえない切ない
気持ちで「誰がやったの？」と聞いた。すると兄は
「おまえには関係ないよ。おまえの知らないヤツだ」

と小さな声で淋しそうな目をして言った。後から聞い
た話だが、その加害者の妹と私は同輩であることを知っ
た。皮肉なつながりというものを感じた。加害者の妹
とは親しくもなく話しすら交したことがなかった。し
かし、私はいつしか敵対心を抱くようになっていた。
妹には罪はなかったが、中学生になって運命のいたず
らで私とその子は同じクラスになった。ある時、ちょっ

とした彼女の言動が私を小バカにしているのに腹立た
しくなって、彼女をキツとにらみ、その場を立ち去っ
た覚えがある。そして、私は悔しいやら何やらで一人
で泣きじゃくっていたことも覚えてる。その時、初
めてどれだけ兄を想っていたか、自分がどれだけ兄の
敵^{たき}を討ちたかったことか分かったのだ。

だから橋本さんの息子さんの弟の気持ちも少しは理
解できるつもりだ。兄弟愛はまた、親が子供を愛する
のとは少し違っているものである。同じ母親の腹から
生まれた、かけがえない存在なのである。全て本音
で物を言い合い、本気でケンカをし、ある時は一緒に
両親を想う相手……。兄を失うことは、自分の分身を失
うようなものかもしれない。性格や外見が全く違っ
ても、同じ遺伝子を受けて、この世に存在していた
ことは確かだからだ。橋本さんの息子さんのように、
私の兄は同輩に暴力を受けた。だが、私の兄は命には
影響がなかっただけのこと、心の傷はずっとあれか
ら引きずって生きていると思う。勿論、両親も思い出
しては心を痛めている。兄は今も生き続けているけれ

ど、一步間違つて打ちどころが悪かったら……と考えると、橋本さんの息子さんの死は人ごとではない気がする。橋本さんは、息子さんの死から立ち直るために、寺院の住職の奥さんに話を聞いてもらったり、水野先生に話を聞いてもらっているとおっしゃっていた。私の母もやはり、兄がいじめにあっていたという事実を友人に話したり、人々の集いに参加して発表していた気がする。親にとっては、やり場のない思いを少しでも共有してくれる人々と接触することで癒されるのかもしれない。しかし、橋本さんの話を聞いていて、やはり大声で泣くわけにもわめくわけにもいかない辛さは一人で耐えなければいけないということを知った。私の母も兄のことで悔しくて、毎晩泣いていたのかも知れない。いや、負けず嫌いの母は、涙をぐつとこらえて歯をくいしばって戦っていたかもしれない。強くならなければならぬと思ったに違いなかった。それが息子を守るためには必要だと思ったのだろう。私の記憶では、その時の母を観察するだけの洞察力もなかったから、心情の詳細について深く考えることも

なかった。しかし、橋本さんの話を聞いて、遠い日の私の身の周りで起こった出来事と重ね合わせたのだ。それによって、当時の私の母の気持ちを深く考えるきっかけができた。小学生の私には見えなかったものが、今なら見えるようになった。子供の社会と大人の社会とで仕切られていたあの頃は、大人である両親の気持ちを理解することはほとんどなかったからだ。大人の社会に全て疑問を持っていたような気がする。私は幼かった。しかし、私の兄は、多少なりとも、両親の心配する姿を見て親に詫びていたことだろう。心の中で、親には済まないと思っていただろう。別に兄に責任があるわけではないのに、そういう罪悪感にかけられたことだろう。時には、両親をかばえるぐらいに大人になりたかったのではないかと思う。

西田さんの息子さんの英史君も両親に対して詫びていたことも、テレビドラマを観たとき分かったからだと闘病生活中に、自宅で、ベットから起き上がろうとしていた英史くんを手伝う西田さんに、英史くんが「お母さんも大変だね」という言葉をかけていた。自分の

方が、いく倍も大変だろうに母親をかばって「がっかりしないで、聞いてね」と病状悪化を説明しようとした英史くん。十八歳の青年が、冷静に、そして病気に

きちんと向き合っていたという事実を西田さんはおっしゃった。そして、自分の人生⇨子供の人生と気づかされたと言語する西田さんからは、しっかりとした意志のようなものが伝わってきた。多分に、それは英史くんが心の中にも存在していて、英史くんと共に過ごした闘病生活の記憶から目を逸さないという意志のようだった。そして、それを私達若者に真っ正面から向き合って話してくださった。だから、私達の心へダイレクトに伝わってくるものがあつたと思う。「泣きたいなら泣け。わめきたいならわめけ。治すのは俺だ」と英史君の日記に書かれていたという事実から、闘病生活の始めの頃に既に戦っているという精神力があったらしい。また、他の日の日記には、「無気力だった。生き延びることが第一ではない。毎日を精一杯、生きることが大事。やれるだけやってみようと思う。大事なことは挑戦することだ。俺は戦うことを選ぶ」とい

うことも書かれていたという。

私は自分の心に響いてくるその日記の言葉を、西田さんが話してくださっている間中、書き留め続けた。

何か、私が今後、どう生きるかについての大きな課題を与えられたような気持ちだった。私は毎日毎日、何をすべきか考えて過ごしているだろうか。毎朝、自分はその日にすることを決めて、その日のうちに実行できていくだろうか。そして、毎晩、反省して明日の課題にしているのだろうか。私は一日一日を精一杯生きているだろうか。「明日、死んでも悔いのない生活をしろ」という英史君の父親の言葉も印象的だ。英史君も英史君の父親も、病気とちゃんと向き合っていたという。二人共、逃げずに現実的に捉えていたという。こういう時、女性は感情的になってしまうものだけれど、男性はいざという時にしっかりとするものだなと思つた。英史君が、大学受験まで生きることができな

いと分かつたうえで、受験勉強をするという作業を続ける選択をしたということに胸を打たれた。私は、勉強がしたくて大学生になったのは事実だった。けれ

ど、精一杯、勉強しているだろうかと考えるとまだ力を出し切っていない自分に気づく。大学生になることを夢にみていた浪人生活は、私にも短いながらあった。その時は周囲に友達はいなかった。高校を卒業したのは、私の先輩が大学一年になった夏だったからだ。留学先から日本に帰国した、夏休みからの半年間は孤独との闘いだった気がする。予備校も個人学習のところだったから、知り合いいいなかったし、つくろうとは思わなかった。両親と私の三人で生活するという生活スタイルもその時から始まった。兄は就職して一人暮らしをしていたし、祖父母とも少し離れて生活した。その時の私は両親が家にいてくれる時でも、孤独を感じていた。同じ年の仲間が恋しかった。大学に、学校に早く行きたいと思った。だから、英史くんが学校に通えなくなるとして自宅にいた時は心の中に空虚さがあったのではないかと思う。彼は病氣と戦い、孤独とも戦ったのではないだろうか。孤独と戦うことで、強い精神力は養われるのではないかと私自身、考えるからだ。そして、その戦いに勝った者こそが、周囲に対しての

気配りや感謝の気持ちをもって相手を思いやることができるようになるのだろう。英史くんは勝者なのだ。彼は、日記に「生きているうちにできることをやろう。周りに感謝したい。物や周りに感謝するために生きる。周りがいて、自分がいることに初めて気づいたよ。今までは俺のことばかり考えていた。これからは違う。」と書いていたらしい。周囲の人々に感謝して生きるという行為は、なかなか十代の若者にできるものではないであろう。私も含めて、ほとんどの若者は、自分のことしか考えていないのではないかと思う。英史くんは精神年齢が高かったのであろう。いや、短い闘病生活の中でたくましく戦い続けるうちに、精神が飛躍的に高い水準に到達したのではないだろうか。「明るくいこうよ。明るく」と、再入院を決意した英史くんは両親に言ったという。泣いていた両親に、彼は涙一つ見せずにいたらしい。

橋本さんの息子さんも、西田さんの息子の英史くんも「生きること」をこの世で生かされている人々に教えてくれているのだと思う。彼らはもうこの世の人々

ではなくなってしまったが、彼らの死は、生きている人間に「もっと生き生きしろ。時間を無駄に過ごすな」と訴えかけているのではないか。さらに、人は生きていてではなく、生かされているということをし、私に気づかせてくれた気がする。『心を癒す物語』の本の文章中に、「パリサイ人と取税人」の話があるが、それらも例の一つだといえる。これらは本来『聖書』に掲げられている物語である。

「自分を義人だと自任し、他の人を見下している者たちに対しては、イエスはまたこのようなたとえを話された。

『ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もう一人は取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ、私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者でなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようと

せず、自分の胸をたたいて言った。『神様、こんな罪人の私をあわれんでください』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くするものは高くされるからです』（ルカによる福音書）十八章九〜十四）

このことから分かることは、「生かされている」という謙虚さを失ったパリサイ人の高慢さを例にして、批判されているという点である。一方、取税人の方は精神的な謙虚さ、つまり回心や悔い改めの姿勢があるということイエスに認められたとされている。

私は「生きる」ことの意味は、利己主義になっていでは追求できないのではないかと考える。謙虚な気持ちを常に持ち、決して高慢にならずに生活していくことが大切であり、今後の私自身への課題となるだろう。人間は皆、「生かされている」のであるということ念頭において日々、生活を送れば、与えられた時間なりチャンスをも有効にしようとするはずだからだ。生きていくことの意味は、心臓が動いていることとは一

致しないのではないかという気がする。心臓が動いて、身体上、生きている人間でも、人間らしく、生き生きしていなければ「生かされている」ことが無意味化してしまうのではないかと考える。

私は、橋本さんの息子さんのことも西田さんの英史君のことも忘れないでいたいと思う。実際に会ったわけではなく、間接的に話を聞いただけだったが、心に残しておきたいのだ。「僕達、これから一生懸命、生きていくからね」という橋本さんの息子さんのクラスメートの言葉に私は同感するものがあつた。そして、今日改めて、「生かされている」ことに幸せを感じ、周囲に感謝してみたい気分になった。そして、やりたいことを精一杯、やりたい気分になせられた。「生き生きと毎日過ごして、新しいものに触れて感動したい」。これが、私の課題でもあり、人生においての生きる意味なのかもしれない。これから、未知のものにどんな触れて、新しい発見を続けていきたい。

私にとっての生きることの意味の探究は、「探究」よりもむしろ「探求」なのかもしれないと思えた。

三、死から生を考える

英語学科 一年 岩橋弥和子

これまでに、人間として生きることの意味を真剣に考えた事があつただろうか。今、「あなたは不幸ですか」と聞かれて間違いなく首を横に振る事はできても、「満たされていますか」と聞かれて縦に振る事は出来ない。自分は現に大学生活を十分に楽しんでいるが、大学での本当の目的を自分自身、果たそうとする努力をしていない。何となく一日が無事終了したという感じである。大学でもっと勉強して、自分は世界へはばたく人間になるんだ、と心に決めていたはずなのに、今、私を感じている事は、期末試験がイヤだとか、早く夏休みになってほしいと遊ぶ事を考えている。こんな素晴らしい環境の中で折角、伸びのびと勉強できるというのに、自分の考えの矛盾に呆れている。情けなさすぎはしないだろうか。また、私は大学の寮で生活しているが、部屋にはTVがないため、何だか寂しい気がする。そこで父に「テレビを買ってもいいか」と

相談してみた。返事は当たり前の様に「NO」である。それもそうだ。この時また自分の大学での目的を見失っていた事に気付かされた。七月十六日に心の痛みの体験発表で、勇氣ある発言を下さったのを聞き、西田英史君のお母さんの話を聞いていて、ずっと考えていました。「私だったら自分の死に対して、どのような受けとめるのだろうか」。もし、私が「死」というものを告知されたなら、まず初めは、きっと「親より先に死ぬなんて、申し訳ない」と感じると思ったのだ。なぜなら私は、今まで生きてきて自分のやりたい事をしてきていると思っていたが、深く考えてみると、親の事を気にしていた様に思う。つまり親がどうしたら喜んでくれるかというのを考慮しながら行動してきたのかもしれない。だから、時々、今自分がしている事が、本当に自分のしたい事なのかと問いかけてみる。そして心のどこかでは、少しでも、親を喜ばせたいという考えがあるはずなのに、将来の為だとか、自分の為だという風にとらえる。だけど、親の言う通りにしてよかったと、今は思っている。いやそう思おうとし

ているのかもしれない。中学から高校に進学する時、私は、テニスの推薦で高校入学して、思いっきりテニスをしようと考えていた。そして国体選手になるのが夢だった。だけど両親は、私の将来を考えてその事に反対した。今となっては、親の言う通りにしてよかったですと思っているが、もし高校時代に死んでしまっていたら、きっと後悔していたに違いない。それに、この事はあまり言いたくない事なのですが、この大学へ入学した事も、もちろん自分の意志で決めたのだが、自分の意志だけではなさそうだ。私は、麗澤瑞浪高等学校へ入学した。母は、推薦で麗澤大学というすごい大学に入れるから、推薦してもらいたいのなら、頑張っておいた方がいい、と私に何度も何度も言ってきました。その事で私は、自分の為に勉強するのではなく、麗澤大学へ推薦してもらう為に勉強しているのではないかと思うようになったのです。また、そう思う様になったのを母のせいにしていた。しかしその事が、単なる都合の良い言訳だというのがわかりました。結局は度胸も甲斐性もなかったというそれだけの事だっ

たんです。私は、自分でテニスプレーヤーには向いていない、もっと勉強してみたいと思ったはずなのに、親のせいにしてしまっているのである。私の両親は決して「これをしなさい、ああしなさい」と断定的には言いません。ただ、人生の先輩として、私に少しでも、いい方向へ向かう様にアドバイスしてくれていただけなのです。だから「死」という事を告知されたなら、もっと生きていく事に執着するだろう。だけど今まで自分に欠けていた物を、両親のせいにしていたというこの思いの罪を少しでも償いたい。そして生きていてよかったという感謝の気持ちを体全体で表現したい。そして英史くんが自分で考えた心理に従って生きた様に、私も自分の心理に従って生きてみたい。その時、自分しかできない事をしたと思った。自分しか出来ない事なんて、そんなにかぞえる程は、ないけれど、死ぬとわかっていても、持ち前の明るさで笑顔を絶やす事なく、私と同じ病気の人、「死」と向き合っている人を励ましてあげたい。「死」をわかったら、きっと私は死んでいく人の気持ちを痛い程、わかるだ

ろうから。そして、やっぱり親を喜ばせたい。精一杯生きていくという事で悲しい思いはさせない。今まで生きてきて後悔はしていないとわからせてあげたい。英史くんは、自分の心理に従って生きる意味を両親に、わからせてあげたので、ご両親も英史くんのその生きる態度に魅せられて、英史君のお父さんは、少しでも英史くんの生きていたという証拠を残そうとメモをとっていたし、お母様はこうして私達の前で、勇気ある発表して下さいました。だから私は、明日死んでもいいように、一日一日を生きようと思った。簡単ではないけれどそうする事で自分は、満たされると感じた。人はいつか死んでしまうけれど、死ぬことを考えて生きていくのではなく、生きる事を考えて過ごすのだ。人生は二者択一の世界で、選択肢の中からたったひとつしか選ぶことしかできないけれど、あの時、あの選択をしていればどうなっていただろうと、いつも心の中にひっかかっています。しかし見なくてはならないのは、これからの人生なのだ。選ばなくてはならないのは、これからの人生なのだ。私は、今までの過ぎさった出来

事に卑屈になりすぎた。自分の人生は、自分で決める。今までだってそうしてきた。すべて自分で選択してきた。人が何と言おうと、自分の思うべき事をやる、自分の心理が、人に感銘を与えなくても、正しいと思う事をした。今、人に非難されている人だってそれが自分の正しいと思っている事なのであったなら、仕方がないのかもしれない。だけどこれは、ちょっと違う様な感じがする。援助交際を例にとってみても、自分の何の役にもならない。お金の価値感が失われるばかりではなく、自分を傷つけているだけなのである。また、心のどこかでは悪いと知っている彼女たちと私の

心のどこが違うのだろうか。それは、人として善く生きるという違いだ。だから私は人として、また人生を良くして行くには、心を育てなければいけないと感じた。死を目の前にして無気力になるのではなく、冷静に自分を見つめる事のできる心を持ちたい。心の持ち方次第で、人生の善し悪しも決まるだろうし、自分の幸せだって左右されるのではないか。とにかく、今は、生きているという事、自分一人で生きてきたのではない事を感謝し、その日一日一日をふり返ってみようと思う。

(学生の在籍年次は平成十年度のものです)

「ブリテイッシュ・ガーデン」を大学祭に展示して

外国語学部英語学科 中山 理ゼミ、

西洋式庭園の文化史

近頃はいわゆるガーデニング・ブームで、デパートやホームセンターにゆけば、必ずと言っていいほどガーデニングのコーナーがあって、鉢植えの花々や種々のハーブをはじめ、しゃれた庭のオーナメントまで所狭しと並んでいる。いうまでもなくブームの主流は西洋式庭園、なかでもイギリス庭園に人気があるようだ。そういえばモラロジール研究所にも西洋式のローズガーデンがあるし、会員会館にはイギリス庭園と称する庭まで作られている。そこでイギリス文化・文学を研究テーマとする中山ゼミでは、今日私たちが「庭園」なる語

で理解する造形空間を再確認するため、文化史的な視点から光をあててその研究成果を出展することにした。

西洋の庭園は、伝統的には特権的な富裕階級によって個人的に造営されたものであり、その花壇や植え込みには造営者の秩序への願望が反映されている。歴史的に見れば、このような個人の支配者による造園が盛んになったのはローマ時代に入ってからのことである。これに比べ、中世の修道院の庭は比較的小規模であり、むしろ宗教的象徴性を優先させる傾向があった。これは聖母マリアを描いた絵画にもいえることで、中世後期とルネッ

サンスの芸術家たちは、世俗的な汚れから離脱しながらも、子宝に恵まれる聖母を象徴するために、閉ざされた「楽園」あるいは囲まれた園 (hortus conclusus) で腰をおろす聖母を描いたのである。したがって近代ヨーロッパの造園史と呼べるものが始まるのはルネッサンス期のイタリアからであり、この時代の庭園の特徴である幾何学的構成は、パリのヴェルサイユの大庭園に見られるように、やはり支配者階級の支配への意志と、新しい時代の理性への確信を象徴している。

しかし同じ頃のイギリスは、ピューリタン革命の洗礼を受けて、王政から議会制民主主義へ向かう移行期にあった。そして十八世紀の市民階級の時代を迎えると、圧政者の精神の象徴とみなされたフランス式整形庭園は衰退の一途を辿ることになる。ここから非整形形式庭園と呼ばれる風景式庭園、すなわち自由な個人がそぞろ歩く多様な風景の庭園が誕生するわけである。その後、この種の庭園はイギリスの自然そのものとだんだん区別

がつかなくなるまで、庭園の塀や垣根まで取り除く「囲まれていない庭」へと発展してゆく。このヨーロッパ史上画期的ともいえるイギリス式庭園は、政治史的には市民社会へ、文芸思潮的にはロマン主義へと向かう時代のベクトルと軌を一にしている。

しかしまったく自然に回帰してしまっは、庭園と自然との区別を消失させることになる。そこで古代風や異国風の神殿などを混在させた「絵画風」の要素を導入しようとする試みがなされるようになる。ただし、このような自然風庭園は大きな土地があつてこそ初めて可能であり、小市民階級向きの空間ではない。そこで限られた土地を利用する個人的な庭園が市民の間に定着してゆくわけである。日本でイギリスの小規模な個人庭園が人気を博しているのは、案外、狭い日本の住宅事情から生まれる精神性を反映しているのかもしれない。

作庭形式から見た東西庭園比較

しかし展示の準備をすすめていくうちに、西洋の庭園だけでは何かしら物足りなさを覚えるようになった。イギリスの風景式庭園ひとつとってみても、日本的な自然観に基づく造園思想とはかなりの隔たりがあることに気づき始めたからである。そこで通時的だけでなく共時的にも、特に作庭形式という視点から、日本の庭園と西洋の庭園とを比較してみることにした。

(1) 整形庭園（左右・前後対称の幾何学的庭園）

整形庭園は西洋の代表的作庭形式の一つである。その典型はフランスのヴェルサイユ宮殿で、イギリスでは、フランス帰りでルイ十四世の従兄であったチャールズ二世のフランス趣味が反映されているセント・ジェイムズ王室庭園がその好例である。他にハンプトン・コート、グリニッジ、プレナム、チャッツワースなどがある。日本では、神社の参道や寺院の山門などにおいて地割が左右対称の形

をとることがあるけれども、樹木の種類や配置が左右同形となることはない。

(2) 風景庭園

西洋にも日本にも見られる庭園である。前者のイギリス風景庭園に関しては、各展示コーナーの担当者に譲るとして、ここでは林泉庭園、縮景庭園、借景庭園、路地庭園、茶室庭園などの日本の風景庭園にふれておこう。

① 林泉庭園

山岳を築山で、湖や海を池で表現するなど、自然の風致を再現したもの。古くは平安朝の寝殿造りの池泉庭園、江戸時代の大名屋敷のように、船を浮べて遊ぶ池や回遊道を設けた大きなものもある。後者の例としては、小石川後楽園、駒込六義園など。

② 縮景庭園

名勝・旧跡などの実在する風景の縮小版を庭園として再現したもの。小石川後楽園には、山城大堰川・木曾寝覚床などの縮景といわれる部分がある。

③ 借景庭園

敷地むこうの景色を庭の景色の一部として取り入れた庭園。修学院離宮など多数。

④ 路地庭園

路地に造られた庭園で、燈籠、飛石、飾井戸、石組などを配置する。

⑤ 茶室庭園

茶事を行うのに適する庭園。

このような日本の庭園の特徴を一言でいうならば、平安時代の橘俊綱が編者の『作庭記』に「生得の山水をおもはて」とあるように、自然の風景のよいところを自分のものとして造ってゆくことが骨子となっている。そして「乞はんに従う」こと、すなわち自然の地形や石の要求に従うことを旨とするように教えられている。これは前述した世俗的な権力―秩序への意志―と理性への確信を象徴し、自然への意志の介在しない西洋の整形式庭園とは大いに異なる発想である。さらに同じ自然を取り入れるにしても、自然美を積極的に読み取っ

て、それを芸術的に再現しようとする日本庭園は、

自然を自然のままに取り入れるだけのイギリス式非整形的庭園ともその性格を異にするものである。

(3) 写意庭園

作者自身の心中の自然を表現しようとする庭園で、日本独自の作庭形式と言ってよい。代表例は室町時代の石組を主とする枯山水で、平安時代の池泉庭園を大和絵とするならば、枯山水は禅宗の自然観を反映した水墨画となるうか。代表的な作例としては、京都大仙院や竜安寺の石庭などがある。

夢窓国師は『夢中問答』で「：山河大地、草木瓦石、みなこれ自己の本分なりと信ずる人、一旦山水を愛することは世情に似たれども、やがてその世情を道心として、泉石草木の四気にかわる気色を工夫する人あり。もしよくかようならば、道人の山水を愛する模様としぬべし」と述べているが、ここに東洋的な道人としての庭園観を見る思いがする。日本の枯山水のように非写実的、非羅

列的、非説明的な手法で、宗教的境地を表現しようとする庭園は西洋にはない。

今回の展示の準備はゼミの英語学科三年次生が中心になって行われた。以下、それぞれのコーナーの担当者に展示内容の簡単な説明と感想をまとめてもらった(名簿順)。

庭における東西文化比較——石川千恵(三年)

今回の展示で私は主に日本庭園を担当し、西欧との比較における日本庭園とその歴史について調べることができ、大変勉強になった。日本の庭と西欧のガーデンを比較するということは、全く異なる二つの自然観を理解することであり、これによって私は日本庭園の根底に流れる日本人特有の精神を知った。それは「乞はんに従う」という言葉で表現される通り、自然界の事物の要求をその在るがままに受け入れるという精神である。西欧では自然を「人間と対立し克服すべき対象」と見るのに対し、日本人は自然の中にとけこみ自然に

従う心を持っている、だからこそ日本人は自然を精神的に捉えてから可視的なものに表現するという独特な能力を持ちえたのではないかと私は思う。作庭だけでなく茶道、武道、水墨画、能など、日本の伝統芸術には一貫してこの禅の精神が浸透しているというのも大変興味深いことである。今回のこの貴重な機会を与えてくださった中山先生にとっても感謝している。

ストウ・ガーデン——石川理恵(三年)

私は、今、日本で流行しつつあり、関心を持たれ始めているブリティッシュ・ガーデンについて調べ、その中でも特にストウ・ガーデンを取り上げることにした。ストウ・ガーデンと言えば、「ハハア」と呼ばれる隠れ垣がとても特徴的で、庭園の美しさを保つための工夫がとても良くなされていることに感心したからだ。

まず、「ハハア」という言葉は、足元に掘られた隠れ垣を見て、驚いて発した感嘆詞が起源だとさ

れている。「ハハア」の仕掛けとは、垂直に二メートルほど掘り下げた空堀があり、反対側は三五度から四〇度の傾斜を持ったスロープになっていることだ。スロープを登ったところは手前の地表面と同じ高さに戻っているので、平らな地表面が続いているとしか見えない。そのような構造の理由は、動物が草を食べたり、底に溜まった雨水を飲み斜面を降りて来ても、自力で戻れるようにしているからだ。このように、ストウ・ガーデンは、人間の手を加えつつ、いかに自然のままに見せるかという工夫により、のどかな光景を保つ風景庭園として有名である。

庭園とハーブ——小松弥生（三年）

イギリスにおける庭園の初歩的な形態は、植物を育てる空間であった。実際、ガーデンングで比較的育てやすいのは、やはりハーブ類であろう。そこで展示では、育て方は簡単なので省略し、ハーブ自体を紹介することにした。取り上げたのは、

ミント、ジャスミン、ラベンダー、カモミール等どれも身近なものばかりだ。ハーブを知っていただけ、活用してもらえたらと思った。

ハーブとはラテン語の *herba* が語源で「草」を意味する。今日では薬草、香草、野菜を含めて「人々に役立つ」植物と考えられているようである。ハーブはまさに祖先から伝わる生活の知恵であり、その利用法も様々である。肉を常食とする地域では防腐剤として、また結婚式や葬式、御祓いなどの魔よけとして、料理の香辛料や薬としても用いられる。古代エジプトでは、ミイラの腐敗を防ぐために使われたそうだ。

家庭で気軽にハーブを楽しむのならハーブティーがいいと思う。ハーブティーにはそれぞれに精神の安定剤や興奮剤の効果がある。例えば、ミントティーは気持ちよく目覚めさせる働きがあるし、ジャスミンティーやラベンダーティーは深い眠りを誘うといわれている。このようにハーブは現代の疲れた人々を癒す薬草であり、利用する価値は十

分にある。時間と場所があれば、ハーブガーデンをはじめてみるのもいいだろう。

チューダー朝を代表する庭園

——清水啓子（三年）

私の担当はハンプトン・コートだった。歴史年表を作成し、その中から特にチューダー様式庭園の代表として、この庭園を紹介することになった。インターネット等を使って調べたところ、現存する庭園は、ヘンリー八世の頃のものだけではないことがわかった。そこで現在も存続している代表的な三つの形態の庭園を取り上げた。その形態とは、沈床式庭園(Sunk Garden)、迷路(The Maze)、結び目庭園(Knot Garden)である。いずれも壁に囲まれているのが特徴で、その頃流行していたイタリア・ルネサンスの庭園様式の影響を受けている。インターネットでは膨大な量の情報が手に入るもの、その中から有効なものを探し出すことには苦労した。一つ一つホームページを開いてその

内容をチェックし、リンクで良さそうなものがあれば、そこを調べるといふ作業をしているうちに、時間ばかりがたってしまった。情報は何でもたくさんあれば良いというのではなく、その質が重要ということを感じた。

ヒドコート・マナー・ガーデン（一九〇七）

——田葉涼子（三年）

この庭園は、イギリス中の中小庭園のスタイルを決定的に変えるきっかけとなったもので、アメリカ人で、後にイギリスに帰化した、ローレンス・ジョンストンの作品である。彼の考えた趣の違う二十五の「アウトドア・ルーム」は生け垣で囲まれ、完成まで四〇年以上かかっている。裕福な家庭の独り息子として育った彼は、造園の専門家はなかったが、独学で自分の庭へのイメージを膨らませたと言われている。花による空間設計では、絶頂期にあったガートルード・ジョーキルの助言を取り入れ、また、イタリアの沈床式庭園、さらに

オランダ式庭園の技法を応用し、古典主義の復活ともいえる庭園を作り出した。しかし、純然たる古典主義に対抗するかのようには、パーゴラやテラス、敷石は見られず、庭の骨組みにはイチイやブナの生け垣や、芝生が用いられている。つまり、単なる古典主義的庭園の復活ではなく、「古典主義庭園の基本構造」(＝直線・レギュラー的)に「自然主義的味付け」(＝不規則・イレギュラー的)がなされたのである。

展示で大変だったのは、アカデミックでありながら、一般の方々にも興味を持ってもらえるような、視覚に訴えるものに仕上げることであった。そのため、庭園の写真や、庭園用語を説明するための写真を集めるのに苦労した。しかし、扱うテーマが庭園というだけあって、綺麗な写真をたくさん見ながら楽しく作業ができた。展示参加の準備を通して、ゼミ全体の団結も深まり、とてもよかったですと思っている。自分自身の勉強にもなって楽しかった。

イギリスの王宮の庭と日本の貴族の庭

—— 天童志織 (三年)

私が担当したのは王宮の庭である。ヨーロッパの宮殿でまず一番に思いつくのはヴェルサイユ宮殿だ。この宮殿の始まりはルイ十三世が狩猟のために建造したヴェルサイユの小館で、これを息子のルイ十四世が気に入って、改築されたものが現在のヴェルサイユ宮殿である。私が写真として取り上げたのは宮殿内のアポロンの泉、庭園正面と鏡の間の前にある庭で、宮殿とアポロンの馬車を結ぶ緑の線(芝生)が広大なヴェルサイユの中軸となっている。よく整えられ、計算し尽くされた庭は、このフランスが発祥の地である。これとは正反対にイギリス貴族の庭は自然を生かした造りになっている。装飾的なものはほとんど造らず、丘などを生かした緑が印象的だ。

日本の庭としては桂離宮と京都御所を取り上げ、前者の桂離宮の特徴としてつぎの三点に注目した。第一はモダンなデザイン、第二に洗練された調和、第三に池に向かって内閉していく空間である。ヨーロッパとは異なり、四季の移り変わりがはっきりしている日本では、同じ庭でも、紅葉や雪景色などで違った趣を感じさせる。この点も、日本の庭全体を通じて言える特徴だと思う。

今振り返ると、今回のゼミの展示を通して、とても楽しい思い出をつくることができた。実際に用意をしている間はとても大変だった。支度や後片付けなどの力仕事は、男性が一人しかいない私たちのゼミにとっては、とても骨の折れる作業である。しかし、展示の準備作業を通して、ゼミの仲間とも今まで以上に仲良くなれたし、何よりも私たちのしたことが、こういう形で『麗澤教育』に残るということは感動で一杯だ。私が大学生生活で経験したことのほとんどは自分自身の経験としては残っても、形としては残らないものだった。

今回の展示は私が大学生生活で一つのことを成し遂げたという証明になると思う。ゼミの展示という機会を与えて下さった中山先生に感謝したい。

コンピュータを駆使した年表作り

——土佐和也（三年）

私の担当は西洋庭園の歴史の流れだったが、関係資料の中の年表を参考にしたので、実際に調べものをする作業には参加しなかった。したがってコンピュータを使つての各項目のパネル作りやアレンジといった実務が、私の主な仕事となった。実際の展示物作成では、みんながパソコンで打ち出した原稿をプリントアウトして張り付けたのだが、プリンタのトラブルなどもあって、作業はなかなか捗らなかつた。

また、歴史年表は西欧と日本の庭園の変遷を時代ごとに比較しながら形にしていたわけだが、日本庭園のほうを担当した石川さんといういろいろ案を絞って悪戦苦闘した結果、横造紙三枚に及ぶ

歴史年表が完成した。

いろいろと作業も大変だったが、学祭という機会にゼミで発表をすることによって、ゼミ内の交流も深まり、充実した日々を送ることができたことを今は嬉しく思っている。

庭と宗教——殿塚雅子（三年）

ゼミの合同研究を麗陵祭に展示してみたらどうかと、専門ゼミナールの担当教授である中山理先生から提案をいただいたのは、夏休みに入る前の七月頃だった。出展するとは決めたものの、学園祭が近づくにつれ、時間的な問題から、間に合うのだろうか、全員がまとまってしまうのだろうか、という不安が心をよぎった。しかし、そのような不安は準備の最終段階で完全に払拭された。皆それぞれが担当箇所を全力で向かい、一人が困難に直面するたびに、それを皆で解決するというチームワークが生まれ、結果的に、あのような満足ゆく展示をするに至ったのである。また、私の研

究テーマである「宗教と庭」は、以前から興味があったキリスト教が庭とどのようなかかわっていたのかを調べたものである。中世のヨーロッパの庭園には聖母マリアにゆかりのある植物が好んで集められ、その周りをぶどうのつるの編み垣で囲むという形式がとられ、それは「ホルトゥス・コングルサス (hortus conclusus) —— 囲まれた園」と呼ばれていた。十七世紀に起こったピューリタン革命で、その形式をとった庭園の多くは破壊されてしまうのだが、現在もその伝統は失われることなく、愛好家達の間で親しまれているということだった。

今回この研究をしたことで、より深く庭について学びたいと思うようになったし、それと同時に、皆で力を合わせて一つの目標に向かう喜びを味わうことができた。このような学生時代にしかできない、かけがえのない経験は一生忘れないだろう。



廣池学長に展示の説明をする清水さんと田葉さん

ヨーロッパ庭園の発展——平木真由子(三年)

私は、この展示のなかでの導入部となる、ヨーロッパの庭園の発展についてまとめることにした。まず、ヨーロッパにおける庭園造りの流行のもととなった十六世紀頃のイタリア・ルネサンス期の庭園は、フランスでは、支配階級を意識したフランス式整形庭園として流行した。しかし、十八世紀、市民革命後の時代のイギリスでは、フランス式庭園は、王政者の精神の象徴として目の敵にされたため、緩やかな起伏の地形を基盤としたイギリス式風景庭園が生まれた。さらに時代が進むと、広大な土地を持たない小市民階級が、限られた土地を利用した庭園を造り、また、日本でいう盆栽のようなガラス鉢園芸を楽しむようになる。

この展示では、自分の調べるべきことを決めるのが遅くなり、遅れをとってしまったために大変な思いをした。それ以外は、展示の準備も、先生やゼミの仲間とともに楽しくやるという雰囲気だっ

たので、苦になる点は特になかった。今回の麗陵祭では、全体として展示を増やしたいという実行委員の希望もあつたらしく、自分たちの展示が、自分たちのためだけでなく、学祭のためにもなったということは、とても喜ばしいことだと感じている。大学時代のとてもよい思い出になった。

イギリスのピクチャレスク庭園

王立キュー植物園——山口晶子（三年）

ロンドンの南西部に位置する王立キュー・ガーデンは十八世紀に創設された植物園である。一二〇ヘクタールにも及ぶ敷地内には世界中から集められた六〇〇万種という植物標本が保管されている。また現存するヴィクトリア期最大の温室、テンペレートハウスやパームハウスも有名である。

この植物園の庭園の特徴は、庭園内に建てられた建築物にあり、それらのほとんどは建築士ウィリアム・チェンバースによって計画されたものである。パコダと呼ばれる中国風の塔をはじめと

て、孔子の家、モスク、ダロット、廃虚が造られ、十八世紀当時に流行していた東洋趣味が色濃く反映されている。この植物園のように庭園内に建てられた建築物により、絵画のように視覚的なおもしろさを味わえるように構成する手法を「ピクチャレスク」、その庭園を「ピクチャレスク庭園」と呼ぶ。

甘美な空間

最後に出展の感想を一言でまとめれば、私たちが中山ゼミにとって、庭という造形空間は、まさに甘美な楽園としての空間でもあったということである。そう考えるとき、あの十七世紀の「草と緑の桂冠詩人」のアンドルー・マーヴェルの『庭』の一節が思い浮かぶ。

What wondrous life in this I lead!
Ripe apples drop about my head;
The luscious clusters of the vine
Upon my mouth do crush their wine;
The nectarine and curious peach

Into my hands themselves do reach;
Stumbling on melons, as I pass,
Ensnared with flowers, I fall on grass.
Andrew Marvell "The Garden"

何と素晴らしい暮らしを送れることか！

熟れたリンゴが私の頭のあたりに落ちる。

みずみずしいブドウの房は、

私の口につぶれ、その美酒を滴らす。

スバイモモや珍しいモモは、

おのずから私の手のうちに垂れ下がる。

通りすがりにメロンに躓き、

花々に足を取られて、私は草の上にたおれる。

— 『庭』より —

参考文献

John Harris, *A Garden Alphabet* (Octopus Books Ltd, 1979)

赤川 裕著 『英国ガーデン物語／庭園のエコロ

ジー』（研究社出版 一九九七年）

野田正彰著 『庭園に死す』（春秋社 一九九四年）

林健太郎編 『ヨーロッパの宮殿一五 世界の文化史蹟』（講談社 一九六九年）

八尋和子著 『憧れのイングリッシュガーデン』

（主婦の友社 一九九七年）

丹羽県三記念出版会編 『日本文化としての庭園』

（誠文堂新光社 一九六八年）

マーガレット・ドラブル著／奥原宇、丹羽隆子訳

『風景のイギリス文学』（研究社出版 一九九三年）

Internet Home Page

<http://www.the-eye.com/hegardens.htm>

<http://www.royal.gov.uk/history/henry.htm>

<http://www.buckinghamgate.com/events/features/hampton/hampton.html>

<http://www.ngardens.org/DF-MG-HE.html>

<http://www.rbgekew.org.uk>

<http://www.planetquake.com/mama/amph/ampton.html>

（学生の在籍年次は平成十年年度である）

第三十五回麗陵祭レポート

麗陵祭実行委員会

一、アウトライン

期 日：平成十年十一月一日～三日

テーマ：Leap Forward ～一歩を踏み出せ～

理由 麗陵祭を通じて参加者・来場者すべての人達に、「新しいことを始めたい」「新しい自分を発見したい」「新しい出会いをしたい」……など十人十色の新たな意欲を持って欲しい。

来場者数：約一万九二〇名（過去最高）

規 模：合計 九一団体

出店団体 四八：…大学校舎内（二号棟）、

屋外テント、フリーマーケット

展示団体 一六：…大学校舎内（一号棟）

イベント団体数 二六：麗大生、他大生、近隣市民

チケット制コンサート：七〇〇人規模のコンサート

を実施

二、主な内容

コンサート／ライブ

チケット制コンサート：【MOON CHILD】のライブ

を開催。約七〇〇名の観客。

無料ライブ：インディーズNo.1バンド【処女航海】の

ライブを開催。

国際文化・留学生

四大語劇：日本語・英語・ドイツ語・中国語の四カ

国語による劇。(一カ国語劇×四)

外国語教室・学生による、英語・中国語・ドイツ語・

韓国語の基礎レッスン。

GYR講演会・NGO「幼い難民を考える会」による、海外の状況報告会。

韓日文化研究会・韓国人留学生達による民族舞踊の

披露。

学生なんみん問題研究会・海外難民の子供たちが描

いた絵の展示。

留学生交流サークル・留学生たちの母国文化を紹介。

留学生の母国料理・マレーシア、中国、台湾、タイ、

韓国、ドイツの母国料理。

地域社会、他大学交流

市民団体による展示・市民サークル(三団体)が参

加。

近隣小学生の絵を展示・計一〇〇枚を展示。

小学生プラスバンド・合唱団・近隣の小学校が参加。

エイズキャンペーン・厚生省主催のエイズキャンペー

ンに協力。

大道芸・東京大学の大道芸サークルが麗陵祭で芸を

披露。

主なイベント

輝け！ベストカップル賞・麗澤大学のベストカップルを決定。

麗大人気者コンテスト・学科代表の人気者たちが麗

大人気No.1を競う。

メイク教室・プロのメイクアップアーティストによるメイクアップ教室。

実行委員会の取組み

リサイクルオブジェ&ゲート・

使用済みペットボトル・牛乳パックを利用し、環

境問題をアピール。

発泡スチロール容器リサイクル・

発泡スチロール容器を回収し、リサイクル&ゴミ

削減。回収率六七・五%

三、目的および感想

二十一世紀の麗陵祭とは

国際経済学部 国際経営学科 四年

第35回麗陵祭実行委員会 委員長 長谷川浩之

近年、大学祭の危機が全国の数多くの大学で叫ばれています。それは、なぜなのでしょう。大学祭そのものが、時代遅れになってきたためであるという意見もあります。しかし、私はそのように思いません。むしろ、これからの時代こそ必要になってくるのではないかと思います。八十年代後半のバブル期ごろから、急速に大学生の無気力・無関心・無感動（3M）化が進んできました。最近の流行のほとんどは高校生を発信源とし、マスメディアに躍らされた高校生たちは高校時代を人生の絶頂期と考え、将来に希望を抱こうとしなくなっています。そのような彼らが大学生になったら…。このように、今後ますます大学生の3M化が進むと考えられます。

では、このような状況の下に置かれている大学生は、将来に対して悲観的であるしかないのでしょうか。先に述べたように、だからこそ大学祭が重要度を増してくるのです。かつて大学紛争が盛んだったころ、大学祭は政治的な主張を行う場としての役割を果たす度合いが強かったと思います。同様に、現代の大学祭にも現代なりの役割が必要だと考えられます。それは、大学祭を通して得られる、協調性・自発性です。大学祭を築いていくにはチームワークすなわち協調性が必要不可欠です。チームワークは、自分が置かれている状況を客観的に眺め、自分にできることを積極的に探すといった自発性が問われます。たくさんの団体がお互いに発表し合い、お互いに刺激し合うことができるのは、やはり大学祭の大きな特色です。このような活発な姿は、見学に来た来場者にも大きな影響を与えます。つまり、少し誇張した表現を用いるならば、「大学祭には人間としてのフレーム（幅）を広げるためのすべての要素が含まれている」と言えると思います。

以上のことを参考に、二十一世紀における大学祭

(麗陵祭)の役割を考えるならば、
“様々な価値観を提供する場”と位置づけるのが最善策であると思いません。知識や経験が豊富でない若者が、多くの価値観に触れ自分自身の価値観(アイデンティティ)を確立するために大学祭はとても重要な役割を果たします。多くの価値観は若者を刺激し、そして刺激を受けた若者同士がさらに互いを刺激し合います。その結果、よりよい麗陵祭、よりよい麗澤大学が築かれていくのです。

千島ゼミ

外国語学部 中国語学科 三年 石川 暁崇

麗陵祭に千島ゼミとしてアカデミックな展示で参加しよう、これが全ての始まりです。

『大観』を取り上げたきっかけは、(千島先生からの推薦があったことはともかくとして)一読してその内容に深く感銘を受けたからです。この詩集には、作者、周大観が小児癌を患い、わずか十年という短い時間を感じたこと、思ったことがたくさん綴られています。

す。そして私たちは皆様に、私たちが受けた感動を手く伝えられるよう、また誤訳がないように推敲を繰り返してきました。癌と闘った台湾の一少年の切なる想いを、皆様に少しでも伝えることができたなら、私たちも翻訳のしがいがあったというものです。

当日の展示会場には、多数の方々がお運び下さり、また台湾で設立された周大観の名のもとでの基金会对する多くの募金を頂き、誠に有難うございました。

そして、麗陵祭フィナーレにて「展示広告大賞」を受賞。私たちはその興奮が冷めぬまま千島先生の御自宅に押しかけ、改めて展示部門に参加できた喜びを存分に嘯みしました。

中山ゼミ

(詳細は本誌七一頁以降参照)

竹原ゼミ

外国語学部 日本語学科 二年 渡辺 朋子

私は麗陵祭を通じて予想以上の素晴らしい経験を得たと思う。「アジアの鼓動」は主に竹原先生の教養ゼミナールを受講した学生が参加しており、私は二回目の参加になるが、初めての代表の経験のため、一体どうなるんだろうと不安だらけであった。しかし去年に引き続き出店に参加した二年生と、初めて経験する一年生が一つのことを成し遂げるために協力し、また楽しんで活動することができ、今ではその素晴しさを感じている。何もかも始まってみないとわからないことだらけだったが、竹原先生をはじめ、去年までの代表であった先輩方などいろいろな方からアドバイスを預けたことも自分自身の成長につながったのではないかと思う。

今でも思い出せば辛かったことよりも楽しかったことばかりが目につかぶ。が、しかしまだまだ課題もたくさんある。この麗陵祭を通じてできた仲間との出会

いを大切にして、また来年、もっともっといいものにして、しようといふ力を合わせていきたい。

「中国語劇」を終えて

外国語学部 中国語学科 二年 田口 雅章

僕たち中国語学科の有志は、麗陵祭において中国語劇「リトルマーメイド」を公演しました。有志の大半が劇に関して素人という不安の中でスタートを切ったのは、九月の後半でした。去年の劇では役を演じただけで、どうやって劇を公演に向け運営していくのかわからないまま、今年は対外代表を任せられました。演出の白馬君と毎晩どうやらよい劇が作れるかどうか試行錯誤し、時には口喧嘩になりながら、一ヶ月半とても忙しい日々が続きました。そんな中、気が滅入ってしまふ時がありました。その時いろいろと協力してくれる先輩の方々の支えはとても励ましになりました。そしてようやく公演当日を迎えました。

公演の会場、一五〇三教室は満員御礼で、僕も客席

の方から劇を見守りました。皆ががんばり一丸となって練習をしたおかげで、劇は大成功でした。そして終りのカーテンコールの時、役者の皆さん、照明・大道具などの裏方の皆さんがとても頼もしく、たくさんの方々の協力がとてもありがたく思えました。僕は今まで他人の事はあまり干渉せず、自分は自分、他人は他人という考えでいました。しかし劇を通じて、困っている時に支えてもらうことは、どんなに助けになる事か学びました。劇をやっていたからこういうことを体験できました。劇って最高です。

麗陵祭のRIFAの展示担当をして

国際経済学部 国際経営学科 二年 加藤 雅子
夏休みが終わり、もうすぐ本番だという頃、どんな展示にするか、まだ決まっていず、留学生とコンタクトもとれていなかったため、次第に自信がなくなっていく。ちょうどその頃、学校以外で災難が続いたので、もう辞めたいと何度も思ったが、任された以上最

後までやろうと思い直した。

当日一週間前によく構成が決まったのだが、六ヶ国の紹介をするのに肝心の資料が集まらなかったり、忙しいために来られない人もいてメンバーが足りず、当日に間に合わないのではないかとさえ思っていた。それが当日の十時直前に仕上がったのだ。こんな状況でできたものが優秀賞をとれたと聞いてとてもうれしかった。こういう仕事はハードでもやり終えた時の感動は忘れられない。

麗陵祭実行委員会

外国語学部 英語学科 一年 羽染 友子
麗陵祭実行委員会は、私が想像していたものよりもとても奥深く、大変なもので、一つの大学祭がこんなにも多くの人たちの大変な努力によって作上げられていたのだ、と正直言って驚きました。私はその中で本部に入り、展示班として活動しました。
私に限ったことではありませんが、今年やること全

てが初めてで、戸惑うことがたくさんありました。そんな中で展示に参加されたいろいろな団体の方々が、自分たちの展示を作るために活動している姿や、一生懸命仕事をする先輩たちの姿を見て多くの刺激を受けました。団体の方々や実行委員の人たちと共に大きな麗陵祭を作り上げている、私はそんな実感を持ちながら仕事をすることができました。

麗陵祭を終えた後も、いろいろな人があいさつをしてくれます。本当に嬉しくてその度に、心が暖まります。実行委員会の一員として麗陵祭に関わったことで、いろいろな団体の方々、たくさんの方々の先輩、友達と知り合うことができたことは、他の人よりも特別な、貴重な体験をさせてもらった、今はそんな気持ちでいっぱいです。

麗陵祭実行委員会文化講演局

国際経済学部 国際経済学科 二年 麻生 浩史

今年度、私は文化講演局局長として、チケット制コ

ンサートを主に担当してきました。チケット制コンサート実施にあたり、一番大変だった事は、チケット制コンサートへの許可を得るまでの過程でした。毎日のように夜遅くまで資料作りを行ったり、赤字対策について何回も検討し直したりといった事でした。しかし、コンサート中心といってもやはり、毎年度新しい事に挑戦したいという気持ちを強く持っていたので、ボランティア活動等の地域貢献イベントへの参加・赤字対策としてのスポンサー募集といった活動を、今年度から始めました。実際に終わってみてからの感想は、大変だったの一言です。しかし、大変だった事よりも更に大きな自分への自信と、何事にも積極的に取り組む気持ち、この一年を通じて実行委員一人一人が得ることが出来たと思います。現在、来年度へ向けた引継ぎの真最中ですが、更なる一步を踏み出す為にも、引継ぎを通じて来年度のビジョンを明確にしていきたいと考えています。来年度以降の、麗陵祭の益々の成長をご期待下さい。

(学生の在籍年次は平成十年度である)

△学友会活動報告▽

部長会の現状と将来の展望

部 長 会 議 長
外国語学部英語学科四年 渡 邊 佑 介

麗澤大学には学友会部長会という機関があります。部長会は、運動部、文化部の各部部长によって構成されており、部の活性化という目標を掲げて活動しています。具体的には、月に一回定例部長会を開催し、翌月の活動予定や、先月の活動結果報告書を提出してもらった上で、顕著な成績の場合にはSUプレス（学友会出版委員会発行紙）などで全学生に報告できるようにしています。また、臨時に話し合う議題がある場合には、臨時部長会を開き、議論できるようにしています。

特に今年に関しては、ただ予定表、報告書を提出するだけの形式的な場になりつつある近年の部長会

の在り方を、部の現状とは異なっていました。学友会会則の部・部長会に関する条項を改定することを通じて確認していかうという方針を定めました。昨年度の部長会からこういった改定が必要であるという気運が高まり話し合ったものの、具体化するには至らなかったという背景もあり、今年度でどうか具現化できるよう臨時部長会も例年より頻繁に行い議論した結果、平成十年度二学期学生総会にて改定が承認されました。これは近年部長会でやってきた活動の中でもかなり大きなものであり、評価できるものだと自負しています。ここに至るまでの各部部长の協力や、学生課の方のアドバイスなどに非

常に感謝しています。

今回の改定は主に同好会から部へ変更する際に必要となる新設の条件、また新設の条件が部存続の条件にもなることから、それに直結する同好会への変更の際の手続き、部長会への出席の義務などを含んでいます。今回は主に成立条件に多くの時間を費やし、検討しました。

問題になったのは活動日数、状況等ではなく、やはり部員数何名をもって部としての活動を行えるかと判断するかの基準でした。この話し合いを始める前に現状把握を目的としたアンケートを行ったのですが、今までの会則では三十名をもって部の成立とすると規定されていたのと比べて、その条件をクリアしていたのは二十一団体中七団体という結果が出ました。これは部が三十名を越える部員数を無理に確保しなくても、部にふさわしい活動と実績を残せるという現実を意味しています。これを考慮すると、人数的な厳しい制限は必要ではないと判断し、三十名以上という規定から、部として対外的な行事、大

会等に参加できる人数であればよいという具体的な数字の表記を避け、小人数でも内容次第で活動が行える表記になりました。またこうすることにより、現在の部に即した規定になっただけでなく、小人数でも部を新設し、予算の援助を受けられるようになり、より部に変更しやすい環境を提供できることになりました。

しかしながら、部になるということには、それなりの果たすべき義務や責任が伴うことも忘れてはなりません。また限られた学友会予算を部の数で割るわけですから、部が増えればそれぞれの部に割り当てられる部費は当然減るわけです。そういったことを考慮すると、予算をもらうにふさわしい部であるという事前確認が重要になります。今回の改定では部への変更希望は九月中にしなければならぬとあった旧会則を変更し、いつでも希望を受け入れる体制を取ると規定した反面、部長会でその希望を受け入れるかどうかの会議を行う際の資料をその団体に対して求めるということも書き足しました。このよう

に一概に部を増設することだけがいわゆる「部の活性化」につながるというわけではないし、今ある部が今以上に活動を盛んにすることが基本だと思っております。そういった意味で、改定はしたけれども、本当に受け入れるべきか、そうするべきではないのかという判断は難しく、認める側、認めらる側双方の主張、意見等を聞く場の提供というのも、改定後に起こりうる問題の一つだと思います。

また、これに関して、大きな問題が残ります。部長は基本的に一年でその任期を終える部がほとんどです。これは部によって差があり、場合によっては一人で二年くらい務める時もあります。これから一年任期というのは変わりませんが、ここから大きな問題なのです。何が問題なのかというと、部長会のメンバーは一年で大きく変わってしまうということです。具体的に言うと、今年度は学友会会則の改定を話し合い、総会での承認を得ましたが、来年度の部長会のメンバーは今年度一年間の活動内容をほとんど知らないのです。ようするに、その年そ

の年の活動がその一年間だけで終わってしまい、次年度への意思と活動の引き継ぎがあまりないになってしまい、その結果同じような内容の話し合いが毎年繰り返される可能性が出てきてしまうのです。その他、今年度話し合って承認された改定案は今後また改定されるまで効力を持ち続けます。学生総会へ部員全員の出席を促したものの、我が男子バレーボール部もままならず、改定されたことすら知らない部長や、部員が来年度部長会のメンバーとなっていてしまうのです。今回の改定された会則には定例部長会への出席の義務、活動報告書提出の義務など毎回しなければならぬ義務が多く含まれています。もし「うっかり」定例部長会に欠席したり、活動報告書を出し忘れた場合、それだけでも同好会への変更を余儀なくされる場合もあるのです。その緊張感は今年度の部長会メンバーはもちろん持っていますが、来年度のメンバーには伝わらない恐れもあり、最悪の場合、議長や副議長が改定を知らず、欠席や出し忘れがあった部に対しても同好会になって

しまったのではかわいそうだからといった主観的な視点から、せっかく改定したにもかかわらず、結局同じように欠席、出し忘れが続くようでは、今年度の苦勞が本当に水の泡になってしまいます。

前々から危惧されていたその引き継ぎに関する対処として、今部長会マニュアルというものを作成中です。これには今回改定があったこと、それにはどんな変更があり、また来年度の部長達に課される義務は何か、定例部長会でやるべきことは何なのかといったことを書く予定です。最終的には、このマニュアルを読めば部長会というものをほぼ完璧に理解できるというくらいの完成度を持ったものになりたいと考えています。やはり今年度の部長会のメンバー一同から言わせてもらえば、ぜひ前に書いたようなことが起こらないよう、今年度の改定を無駄にしないしてほしいのです。マニュアルの完成を急ぐと同時に、来年度メンバーとの接点なるべく持つようにして、決して後退しないようにアドバイスしていくのも今年度メンバーの義務だと思いますので、できる限り

の活動とその推進をしていきたいと考えます。

最後に今後の部長会の役割と、展望を書きたいと思えます。正直に心境を書くとするならば、部長会の将来というものは明るいものではないと個人的には考えています。今でも定例部長会には欠席や遅刻が多く、任意にしていた活動報告書もほとんど提出されません。このような状況をふまえて、今回の改定で定例、臨時部長会への出席の義務、報告書の提出の義務をあえて「字」という目に見えるものにしたわけですが、部長になった時にそういったことが一度連絡されている以上、出席、提出するのが当たり前なわけで、本来的には、オーバーに言えば恥ずべきことなのではないでしょうか。逆に言えば、そうしなければいけない位に部長会には学友会の一部としての部、それに所属する部員という意識が低下しているのです。今回、部の新設を希望する団体の変更希望を部長会で却下することができくらゐに、部長会の持つ権限を強くしたことで部長会のメンバーにも意識の向上を促すという意味も暗に含まれてい

ます。ぜひそういう面でも今回の改定が来年度の部長会の運営にもいい影響を与えていくことを願ってやみません。

また、これはかなり個人的な意見でもあると思いますが、課外活動の重要さというものを同好会、部活動を通じてアピールする場としての部長会という位置を確立してほしいと考えています。麗澤大学はスポーツ推薦で優秀な学生を入学させる制度もありますが、特に男子運動部にとって、女子の割合が大学の特色上多いという状況が不利に働いているということとは否めない事実です。しかしそういったことを承知のうえで部に入っているのですから、まず今ある環境の中で何ができるかということが重要なのではないのでしょうか。そういう活動をまず率先して行う場が部長会であってほしいのです。今は最初に書いたとおり、予定表や報告書をただ出す場という月一回の部の代表の会合といったような雰囲気や部長会が持っているのは事実です。しかしながら、そのような中でも今年会則改定を行い、少しでも部

部長会の在り方を考え直し始めたのですから、これはいかさない手はないと思います。今年度のメンバーから来年度のメンバーにうまく引き継ぐことにより、部長会という存在が課外活動を推進する一番の組織になってほしいと考えます。最近では学長先生も以前にも増して部の活動結果報告に興味を持って下さっており、またこれも直接部長会として大きくアピールできる絶好の機会であるわけで、来年度からでも部長会の存在を学友会組織の一部として意識し、改革していくための環境は整いつつあるのです。

こうして書いてみると、まだまだ部長会のやるべきことやその余地は多く、今年度全力は尽くしたものの、それはまだ一部なのだなあということに気がきます。部長会にもっと学友会の一部なのだと意識を浸透させ、前進するためにも、来年度のメンバーに期待をしつつ、やり残している仕事を確実にやっていきたいと思えます。

野球と大学生活

外国語学部日本語学科 四年 石川泰啓

この文章の依頼を受けた時、私は「部活動に関して書くように」と言われました。この「部活動に関して」というテーマは私にとってかなり難しいもの

なのです。なぜ難しいのか。それは、部活（野球）

というものが、自分自身にとって、決して特別なものではなく、生活というか、人生の一部分になって

しまっている為です。私は日本語学科に所属しています。日本語学科では、日本語を客観的に捉えたり

日本語の構造を研究したりする授業があるのですが、普段、意識せずに使用している母国語を意識して研

究するのは、なかなか苦勞するものです。これと同じように、ふだん意識せずに活動している部活（野

球）を意識して書くのは、私などにはとても難しくなります。だから私はここに本心ではない事を書くことになるかもしれません。

では、具体的にいったいどのようなことをここに書いていくのか。そこで私は部活動をしていない友人からよく聞かれる疑問について私なりの答えをだしてみようかと思えます。その疑問というのは「うちの大学には特にスポーツ推薦とかないのに何で大学生にまでなって部活（野球）やってるの？」という疑問です。

なぜ私は大学生にまでなって部活（野球）をしているのか……。ここでことわりをいなければならない



いのですが、私にとっての部活動は野球なので「なぜ私は大学生にまでなつて野球をしているのか」ということで、文章を書かせていただきたいと思ひます。では、なぜ私は大学生にまでなつて野球をしているのか。その理由は、まず第一に、私にとって野球というものが単なるスポーツの域を越えて、人生を教えてくれる学問になつてゐるからです。よく「大学生の自分は学問をすることだ」と言われてゐます。その通りだと思ひます。ただ、私の頭の中で理解してゐる学問の意味は、授業や専攻学科の勉強をすることだけではありません。友人との関係や、アルバイトをすることや、野球をすることも学問の中に含まれてゐるのです。学問をするということだけでは決して専攻学科の知識を増やすということだけではないと思ひます。友人との関係で周りの人々にたいする有難さを身にしみるように感じたり、アルバイトをして多少なりともお金を稼ぐことの厳しさを知つたりすることも立派な学問なのです。そして野球。この野球というものは、本当に私に多くのことを学

ばせてくれます。人や物に感謝する心。努力は必ず報われるということ。ただ、努力をしても、その努力が理にかなつていなければ意味がないということ。チームワークとは何かということ。相手を蹴落としでもレギュラーになるんだという厳しい気持ちを持たなければならぬということ。結果をださなければ社会は認めてくれないということ。しかし、結果だけを求めてもその後にも何も残らない。何も残らないというか、うまく表現できないのですが、過程に最近よく思うのが、結果よりも過程の大事ななものです。

結果というものは、自分が認めるものではなく、自分以外の人間、自分たちの団体以外の人間が価値を決めて、認めるものであるように思ひます。だから、自分では納得いかない結果であっても他の人からは認められたり、それとは逆に自分自身納得いく結果であっても他の人からは認められなかつたりします。反対に、過程というものは、他人が評価でき



るものではなく、自分自身だけが評価できるものであるように思います。自分の日頃のおこない全てがわかるのは自分だけです。自分が日頃努力してきたこと全てがわかるのは自分だけです。結果というのが現われるまでの全ての過程が本当にわかっているのは自分だけなのです。過程というものを評価できるのは他の誰でもなく自分自身だけである。

私はそう思います。だから、自分で納得いかない過程から、周りに認められる結果を得られても、心の中かの何処かに空しさを感じたり、充実感を得ることができずにその結果がもろく崩れたりします。逆に、たとえ周りからは評価されない結果であっても、自分で納得のいく過程を築きあげてきたときはその結果が次の過程へとつながり、最後には自分自身も周りも認められるような素晴らしい結果が導き出されると思うのです。そういう意味で私は、過程の大事さというのを最近よく考えます。以上のように野球というものは私に、とても重要なことを学ばせてくれるのです。

次に、なぜ私が野球をするのかの二つめの理由ですが、これは第一の理由の中の「過程」に関連してきます。それは高校時代に私が野球に対して自分自身納得できるような過程を築きあげられなかったからです。私は高校から野球を始めました。一般的に考えると高校から野球を始めようというのは、始める時期がかなり遅いほうで、実際遅すぎました。当初はキャッチボールもろくにできずにチームメイトにかなりお世話になりましたが、それでも周りの人に支えられ、助けていただき、なんとか徐々にはあります。ところが上達し、それなりに努力もしてきました。ここがまだ私が自分自身の過程に納得できていなかったところなのです。「ここ」というのは何処かというところと、「それなりに」というところ。この「それなりに」という言葉が使える程度のことしかしてこなかった自分の過程に納得できていなかったのです。「それなりに」しかやってこなかったのです。今考えれば、もっと出来たのかもしれないのに妥協してきたということになります。完全燃焼し

てこなかったのです。これでは自分の過程に納得できるはずがありません。それで私は、このままでは中途半端なままで野球が終わってしまうと感じ、大学で野球部に入部し、現在に至っているのだと思います。なぜ今、私は「現在に至っているのです」と言い切らずに「現在に至っているのだと思います」と表現したのか。それは、大学で野球部に入部しようと考えた当初はここまで深く考えていなかったからです。ただ、今理由づけをすると、その頃から気持ちの奥底ではいま考えていることを漠然とながらも考えていたのだろうと思われるからです。それは現在、私は「それなりに」という言葉を使わずにきっぱりと「努力している」と言える程の過程を築き上げてきているのか。まだまだです。まだ自分の過程に納得できていません。もっとできるはずですが、私が大学生になっても野球をする第二の理由です。

最後に第三の理由ですが、これは非常に単純な理由です。野球をするのが好きなのです。単純な理由

ではありますが、これが一番重要な理由であって、奥深い理由かもしれません。はっきりいって好きじゃなかったら、大学まで来て休みも返上して、時間を削ってまで野球なんてやってはおられません。しかも私の実力では、将来野球で飯が食えるわけでもないのです。それに、一年浪人して体力も落ちていました。実は、高校の野球部を引退したとき「もう野球はやらないぞ」と思い、ユニホームなどを殆ど後輩に譲ってしまいました。大学に入学したときも「野球はもういいや」と考え、入部する気はありませんでした。ところが大学の部活動パンフレットで野球部の欄を見ると、なんとなく気になりはじめ、最初は遠くから野球部の練習を眺めていて、だんだんと近づいて行って、結局「入部したいのですけど」と言ってしまうました。つまるところ、野球が好きなのです。野球をしているときは、普段よりも自分が素直に出せます。「自分が素直に出せる」というよりも「馬鹿になれる」と言ったほうが正しい表現になるかもしれません。妙にリアクションが大きく

なったり、怒鳴ったり、とにかくがむしゃらになれるのです。何か悩み事があっても全く気にならずに野球にだけ気持ち打ち込むことができるのです。

それに、試合で勝利したときの喜びは、他のところではなかなか味わえないものがあると思います。同じ辛さを経験してきた仲間が一致団結して勝利したときの充実感是他にかえがたいものがあります。そして、当然の事なのですが、大学野球ができるのは大学四年間だけなのです。私が真剣な気持ちで野球に取り組めるのはもう今しかありません。大学野球は本当に今しかできないのです。自分が好きなことを真剣にできるのが今だけであるのならば、やらない手はないし、むしろやるべきでしょう。

以上のような三つの理由から、私は「なぜ大学生にまでなって部活をやっているのか」という疑問に答えたいと思います。ここまで書いてみて、やはりはじめに述べたように、私は本心ではないことを書いてしまっているかもしれないし、字数合わせのために無理やりに記述している文章、また矛盾した表

現があることと思います。それでも、野球が好きだということはおそらく、私の本心に間違いはないと思います。

現在、我々麗大野球部は、選手十五名、マネージャー八名、監督、コーチ、皆で力を合わせ、千葉県大学野球リーグ二部昇格を目指し、日々練習に励んでいます。このように活動ができるのも、数多くの方々に支えられてこそできるものと思います。この機会をお借りして、感謝の意を表したいと思います。本当に有難うございます。

最後に、このような稚拙な文章を掲載する機会を与えてくださった皆様に心より感謝いたします。

どうも有難うございます。

初心者にも分かるサニーゲイツ対策講座

軽音楽部部长

外国語学部 英語学科四年

作野貴将

我々サニーゲイツ、通称軽音楽部は、いや、軽音楽部、通称サニーゲイツは、現在部員数三十五名程度で日夜活動を続けております。全体練習はもちろんですが、各セクションごとの練習、さらには個人練習と、部室が空いている日はないくらい活気と希望と情熱と半分男くささで満ちています。

学内でサニーゲイツという名が今だに広く知れ渡っていないので、その意味も込めて、ここ数年は学内での演奏を増やし、一人でも多くの学生にサニーゲイツの存在を知ってもらい、最終的にはその中から是非一緒に演奏をしたいという人を発見し、部員にするということです。実際の成果はまずまずといっ

たところでは。今年は例年にならない新入部員が加わり、現在は二つのバンドに別れているといった状況です。正直なところを言えば、これだけの人数を統率する部長という仕事は非常に大変で、日々抜け毛と胃痛に悩まされています。

昨年は部員が数える程しかいなく、部の存続が危ぶまれていたという状況もあり、当時の部長もすっかりやつれたという感じでした。そして部長という役が僕のところには舞い降りてきました。少ない部員数という状況をどう乗り越えるか、というのが一番の問題でした。答えは八つありましたがしぼりにしぼって一つにしました。その名も新入生獲得②大作戦。

要するに毎年やっていることなんです、そのやり方をちょっと変えてみようということでした。四十年間続いたサニーゲイツを私たちの代で終わらせてたまるか、という強い意志のもと、今年は校内の演奏を増やしました。まず昨年の反省から、入学式の日にはあまり新入生は聞きにこないという情報を得たので、入学式の日には演奏を控え目にしました。また、新入生の過密スケジュールのために、新入生が学校にも慣れて、五月病になってくる時期にやってみました。病が治った人もいるようですし、悪化している人もいます。

年間の活動計画としては、四月―入学式演奏、五月―新入生勧誘演奏、六月―伝統の日演奏、七月―七夕ライブ、八月―休み、九月―夏合宿、十月―こども休んで、十一月―麗陵祭演奏、十二月―クリスマスライブ、一月―正月休み、二月―一年の締めくくりのリサイタル、三月―春合宿、とほぼ一・三三か月に一回は大きな活動をしているといった状況です。以下行事ごとについて説明を加えていきたいと

思います。そしてこのことが本来の目的であるサニーゲイツの現状を示すことになると思います。

四月の入学式、五月の新入生勧誘演奏については先程書いたのでよしとして、六月の伝統の日の演奏においては、我が麗澤大学の創設者である広池千九郎先生の功績をたたえて開かれる名譽ある行事の中で演奏させていただき、おまけに弁当も食べられてサニーゲイツの人間にとってはありがたい行事です。ここ数年ずっと演奏しており、六年連続で弁当を食べている人もいますとかいらないとか…。

七月の七夕ライブは前期の締めくくりとして行われ、一年生のデビューの場でもあります。

九月の夏合宿の目的は十一月に迫った麗陵祭演奏の練習ですが、真の目的は人間関係を深めるということです。同じ時間に起きて、食事を共にして、背中を流し合い、交流を深める…、中には喧嘩もありますが、それでまた一つサニーゲイツの輪が大きくなっていることと思います。

十一月の麗陵祭では、ステージ演奏はもちろんの

こと、二号棟内でジャズ喫茶の営業もやっております。一人一人の力がアップするという意味では非常によい機会と言えます。

十二月のクリスマススライブは年内の締めくくりとして行うもので、ここ数年新たに加えた行事の一つです。ただ学校がクリスマス前に終わってしまうので、お客さんのことを考えて、どこかの七オクターブ出るアメリカ生まれの女の人や髪の毛の長いオッサンの有名なクリスマスソングが流れ始めて、村中がクリスマススムードになって、村人がクリスマスを意識し始めた頃にやるので、ちょっと早すぎて興醒めといったところが玉に瑕きずです。

二月のリサイタルは一年の締めくくり、校外での演奏ということもあって皆止装なんかしちゃってミュージシャンぶってます。チケット代が部費の一部になりますので、是非とも興味のある方は足を運んでみてはいかがでしょうか。そして部活を潤して下さい。

三月の春合宿は夏合宿と内容があまり変わらないので割愛させて頂きます。

主な行事を列挙してみたわけですが、休みの月は活動をしていないのか、というところについてはなく、次の行事にそなえ練習中ということなので怠けてると思わないで頂きたいです。特に十月は麗陵祭前ということで、慌ただしいってこういうことをいうんだ、と思わず実感してしまうくらい本当に慌ただしいです。

続いてサニーゲイツの環境について少し書きたいと思います。冷暖房完備はもちろんのこと、楽器もあるし、トイレも近くにあり、とても素晴らしい部屋です。僕にとっては学内一落ち着ける場所でもあります。例えていうなら、結婚生活も中盤に入ってます。子供たちも手がかからなくなり、管理職につき、そろそろマイホームでも持つかということで都心に近い所に5LDK庭つき、日当たり良好の一戸建ての家を建て、不況でもこない限り家庭円満の中年サラリーマンといったところでしょうか。：でも人生はそんなにうまくはいかないもので、たまに冷房が故障してサウナ状態になったり、地下にあるため湿度

の高い日はベトベトだったり、忙しい時に限ってテスト、レポートがたくさんあったりと、困ったこともいくつかあります。でもそんな環境でも、だまっ
ていても人が集まってくるというまるで県民の日の
ディズニールンドのような素敵な場所です。こんな
素晴らしい環境を与えてくれた学校に対し、本当に
感謝をしております。

さて来年には我がサニーゲイツも創部四〇周年を
迎え、着々と伝統と呼ばれるものを引き継いでい
訳ですが、ところで一体伝統とは何でしょう。僕は
サニーゲイツに入部してからようやく三年が過ぎよ
うとしていますが、サニーゲイツの伝統は三年しか
経験してませんから、もちろん四〇年の伝統が何な
のか分かりません。しかし、今まで経験してきたこ
とからいうと、楽しく音楽を奏でる、ということが
伝統なのではないかと思えます。僕らが演奏する際
には準備、片付け共に部員全員でやります。まだ演
奏ができない人も手伝います。僕たちの演奏は演奏
者だけでなく、部員全員でつくりあげているもの

です。サッカーでいう「サポーター」は十二番目の精
神なのです。よく分かりませんが、ここがサニーの
いいところと自負しております。そしてこれが伝統
とは呼べないでしょうか。

毎年〇〇コンクールで賞をとった；などのような
肩書はありませんがこれでも素晴らしい部活だと思
います。肩書きが何でしょう。一流大学を出てい
ても人を傷つけるどこかの宗教団体もいるんです。ど
んなに偉い政治家でも金で動いている人もいるん
です。肩書きはあるにこしたことはないですが、麗澤
大学軽音楽部サニーゲイツという肩書きがあればそ
れ以上何を求めようというのでしょうか。中には上
をめざせという人もいるかもしれませんが。しかし僕
らはプロじゃありません。学生です。だから勉強も
あるし、バイトもあるし、恋愛もあるし、いろいろ
といそがしいわけですから、楽しく一つの趣味とし
てこの部活に身を置ければよいのではないでしょ
うか。僕も人生かなり変えられました。サニーゲイツ
にいたことでいろんな特徴を持った人と出会い、い

ろんなことを経験して、体がいろんなことを覚えていきました。社会に出る前のステップとしてはなかなか良いものを得られたと思います。これは僕だけに限ったことではなく今の部員、そしてOB・OGの皆さんにもあてはまるものだと思います。

最後に、使い古されたフレーズですが、もう一度生まれ変わって、もう一度人生があるのなら、もう

一度麗澤大学に入ってもう一度軽音楽部サニーゲイツに入部したいです。∴とは思いませんが、一度しかない、まさに一期一会の素敵な経験ができる部活だと思えます、これを機会に今までサニーゲイツを知らなかった人は応援して下さい。応援してきた方はこれからもよろしくお願い致します。

編集後記

本誌第五号は、「麗大を支える人々」と題して、教員のみでなく、部活動を通じて直接に学生の手を取って指導されている方々を取り上げました。これらの方々は大学の陰にあって奉仕で教育に当たってこられました。その高潔な人格と情熱は学生のおかげの的であり、学生指導の面で大きな役割を果たしてこられました。

今回はそれらのうち四名の方に登場願いました。また本誌のために原稿を寄稿してくださった諸先生や学生諸君に御礼申しあげます。

「麗澤教育編集委員会」(平成十年度)

委員長 水野治太郎(外国語学部教授)

委員 黒川 洋(外国語学部教授)

委員 土屋 武夫(国際経済学部教授)

委員 中野 千秋(国際経済学部助教授)

委員 鈴木 康之(外国語学部講師)

編集 『麗澤教育』第五号 編集委員会

発行 麗澤大学

〒二七七-八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二ノ一ノ一

電話 〇四七-一七三-三〇三〇

印刷所 昌美印刷株式会社

東京都足立区綾瀬二ノ二六ノ七

電話 〇三一三六九〇-三一九六

一九九九年四月一日 発行